２０２３年 3月 国際放送番組審議会

２０２３年３月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第７００回）は２２日（水）ＮＨＫ放送センター（ウェブ会議）で８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「A Museum of Memories」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	永井　均	（歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授）
副委員長	阪田　恭代	（神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 教授）
委　員	坂野　晶	（一般社団法人ゼロ・ウェイスト・ジャパン 代表理事）
委　員	佐藤たまき	（古生物学者、神奈川大学理学部生物科学科 教授）
委　員	中曽　宏	（㈱大和総研 理事長）
委　員	中村　勇吾	（インターフェースデザイナー、tha ltd. 代表）
委　員	仲本　千津	（社会起業家、㈱ＲＩＣＣＩ ＥＶＥＲＹＤＡＹ 代表取締役ＣＯＯ）
委　員	村上由美子	（ＭＰｏｗｅｒ　Ｐａｒｔｎｅｒｓ ゼネラル･パートナー）

（主な発言）

＜最近の国際放送の動きについて＞

○　ＮＨＫと韓国ＫＢＳのメディア協力会議がオンラインで開催されたという報告があった。岸田総理大臣と韓国のユン・ソンニョル（尹錫悦）大統領との日韓首脳会談が１２年ぶりに開かれ、あらゆる分野で協力を強化していく機運もあるので、原則毎年開催されているとのことだが、公共放送局同士の交流の場としてさらに活性化することが期待される。また、今回、両国の経済団体が「日韓・韓日 未来パートナーシップ基金」を創設したことを発表した。青少年の交流を含む意義ある内容だと思うので、若者の交流の具体的成果など、基金の取り組みについて、両国民がメディアを通して知ることができるよう、伝えていってほしい。

（ＮＨＫ側）　ＮＨＫとＫＢＳは、日韓の間の外交関係が活発でない時も対話の窓口を保ち、緊密な関係を続けてきた。お互いのコンテンツの放送だけでなく、広く公共放送としての取り組みについて、また、国際協力の分野でも緊密な連携ができているので、今後も続けていきたい。

（ＮＨＫ側）　国際協力の業務を担当する現場としては、国家間の外交的な環境に関わらず、時間をかけて築いてきた関係を大切にして、対話を維持することが重要と考えている。メディアの環境は激変し、公共放送にとっても厳しさ

が増す中、お互いにより強固な関係を築き、協力していきたいと考えている。

（ＮＨＫ側）　外国の放送局で、経営レベルや業務レベルで緊密な対話を毎年続ける枠組みがあるのは、現時点ではＫＢＳのみだ。また、国際協力会議でアジアや世界の公共放送が集まる場でも、ＫＢＳとＮＨＫが意思疎通を密に連携することが多い。長年にわたり協力を続けてきたこと、アジア文化や視点を共有する放送局であること、公共放送の使命を共有できる相手であることが理由だと思う。世界における韓流ブームの先駆けとなったドラマをＮＨＫが放送したということもあり、関係の深い公共放送同士と言える。今後とも関係を維持していきたい。

＜「A Museum of Memories」　（3月１０日（金）２３:３０ ほか）について＞

○　陸前高田の博物館の再生について、その一部のプロジェクトにボランティアとして関わったことがある。１１年かけて復興が完成したことを嬉しく感じている。主任学芸員の熊谷賢さんは、大変献身的な人で、懐かしく、涙が出た。博物館の復興は、文化財や自然史など、さまざまな専門分野におよび、特に剝製標本の修繕や、紙の史料から塩水を抜く作業には、日本各地から、博物館や大学関係者、学生ボランティアなど、多様な支援があった。こうした支援についてはなかなか知られる機会がない。番組の中で、全国から支援の積み重ねがあったことをもう少し詳しく紹介できるとよかった。

○　大変よい番組だと思った。震災の記憶を後世に残す取り組みついての番組はよく見るが、この番組の特徴は、日常の記憶を、震災によって途切れさせることなくつないでいくことの大切さを伝えていることだ。これは一見地味で、なかなか理解が得られにくい点だと思うが、この番組によって重要性に気づかされた。特に印象的だったのが、前半の、気が遠くなるほど地味で膨大な復旧作業のシーンで、大変引き込まれた。熊谷さんと、かつてアカショウビンを寄贈した小学生だった藤澤純一さんが再会するシーンは、熊谷さんに黙ってサプライズの面会を演出していたと思う。よくある“テレビっぽい”演出だと批判的な見方もできるが、結果としてよいシーンになっていたので許容範囲だと思った。

○　震災後の東北を扱ったＮＨＫの番組は秀逸なものが多いが、この番組もその１つとして強い印象と感銘を受けた。長い時間をかけて反復的に取材した賜物で、ＮＨＫならではの質の高い番組だと思う。同じ質感の高さという点では、2020年４月の審議会の視聴番組「Barakan Discovers TOHOKU: The Lost and the Living」が印象に残っている。亡くなった人を忘れなければ彼らは共に生き続け、見えない力となって生き残ったものが生を全うできるように促してくれる、という東北地方の独特の死生観が描かれたが、今回の番組では、郷土の博物館の再生に力を尽くす熊谷さん

の姿に触発され、生かされた人々、生き残った人々が世代を超えた絆と郷土愛を強めていく様子を丁寧に追っていた。その意味で、意図したものではないと思うが、この２つの番組は、私にとっては連続して相互補完的であるように感じられた。また、番組の前半は塩分の除去などの膨大な作業に焦点が当てられる一方、後半はアカショウビンの剝製を通じて育まれた熊谷さんと地元の小学生との１０年にわたる心の交流が描かれ、飽きることなく視聴できた。また、控えめなナレーション、静かなＢＧＭの選択も効果的だった。震災後まもなく、傷跡が大変痛々しかった被災地を巡った経験があるが、この番組を見て、ぜひもう一度訪れ、博物館で数々の展示品に込められた人々の思いを実感したいと思った。見終えて、なんとも言えない温もりを感じる番組だった。

○　１１年間の地道な復興作業が、被災した人々の歩みと復興そのものを現していると感じられ、感銘を受けた。さまざまな専門的知見を持つ人や、地元の経験豊かな高齢者が、知恵を持ち寄って郷土品を復元していく作業の様子から、再生された博物館が、コミュニティーの新たな中心なっていくのだろうと実感した。「新しい物語、歴史が積み上げられていく。ここを目指してきたが、実はゴールではなかった」という熊谷さんの発言が印象的で、博物館はコミュニティーの人たちに支えられながら新たな歴史を紡いでいくのだろうと感じた。さらに、復興の過程で、海外から専門的知識やボランティアの協力が提供されていたならば、ＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮならではの着眼点として加えてはどうかと思った。

○　最初は、津波被災の２、３週間後に博物館の展示品を探す熊谷さんの「人よりも展示品」というコメントに、少々違和感を覚えたが、実は展示品を探すことによって、間接的に人の命を救う、人生を救うことにつながっていったことが分かり、感動した。熊谷さんと藤澤さんの再会には、真実の持つストーリーの力を感じ、制作者の高いスキルにより感動が生まれたと思う。大変質の高い番組だった。また、海外の人々のさまざまなサポートについて、多少でも番組の中で触れられていたら、さらによかった。

○　大変よい番組で、感動した。今、各地のローカルな博物館が改めて見直されてきている中で、博物館の持つ意義や価値を再発見できるストーリーとなっている点が大変よかった。博物館自体がコミュニティーを守り、人々をつないでいく役割があるという点が、震災と津波という極限の経験を通して認識されたところが、価値のある点だと思う。海外にとっても、博物館とコミュニティーという視点から、大変意味のある番組だ。小学生の時にアカショウビンを寄贈し、震災後に陸前高田を離れた藤澤さんと再会を果たすというドラマについて、彼を通じて、被災後、物理的にも心情的にも、故郷に戻れない人が多くいるというシビアな状況にも気づかされた。そのような状況が継続しているという点も、ナレーションなどでフォローがあるとメッセージに深みが出たのではないか。また、字幕と吹き替えが混在していたが、視聴者によっては、統一されていた方が見やすいのではないか。使い分けの方針があれば知りたい。

○　東日本大震災の特別番組として、高品質で感動的な番組だ。震災時と現在を、博物館の復興のプロセスでつないで見せた点が大変よい。日本人のストーリーとしては感

動的だったが、国際放送なので、海外とのつながりをもう少し意識するとよかったのではないか。海外からの関わりはなかったのか、知りたい。また、震災のみならず、戦争やテロ、災害で傷ついた文化財の保護や復興という視点からも普遍性のあるテーマである。博物館の復興は希望にもつながる。ウクライナで戦火の中、文化財をどのように守っていくかというテーマや、ニューヨークの世界貿易センター跡地に建てられた９月１１日 記念館の意義とも関連するテーマを含んでいる。そして、世界的には、博物館のデジタル化にも注目が集まっている。陸前高田の新しい市民博物館でデジタルを意識した展示があれば、その点も海外で興味を持たれるのではないか。

○　東日本大震災がもたらした犠牲の大きさや、人々に心身の傷が残っていることを、博物館の再生物語を通して伝えた優れたドキュメンタリーだ。ＮＨＫは主人公の１人である熊谷賢さんに、2015 年以降、８年にわたって取材を重ねたとのことで、その継続性が重厚な作品につながったのだと思う。熊谷さんが陸前高田の市立博物館の職員で唯一の生存者だったことや、藤澤さんのご家族の震災死、そして故郷を離れたかった藤澤さんの心境などから、視聴者は災害の傷跡の深さを再認識したのではないか。加えて、アカショウビンの剝製を巡る物語には心を打たれた。熊谷さんと藤澤さんの再会の場面は、間違いなく番組のクライマックスで、私も深く感動した。この番組の意義の１つは、文化財や博物館の存在が、故郷の歴史と記憶、人と人や世代の間をつなぐ媒体になり得るということ、そして傷ついた人を励ます契機ともなることを、熊谷さんの活動を通して示した点だ。また、破損した文化財の修復過程を紹介し、課題の一端を示したことも非常に重要だと思う。文化財等のレスキュー作業の事例として興味深く、将来の被災史料の復元に向けた参考にもなるだろう。

（ＮＨＫ側）　海外とのつながりについて、支援金は届いているようだが、技術的な支援は、私たちの取材では、あまり見つからなかった。ただ、修復の過程が今後の参考になるのではないかという点については、熊谷さんが、海外に向けて講演を行う機会もあり、博物館の国際会議での発表や、外国からの視察もあるそうなので、これから共有できることは多いのではないか。また、全国から集まった支援や専門家の知見については、もう少し紹介することもできた。熊谷さんも、専門家、ボランティア問わず、多くの人に修復に参加してもらったことに感謝している。１１年間の知見は、今後、国内外の同様の事例に生かしていくことで返していきたいと考えているようで、実際に、事例も出てきているようだ。また、回収した史料４６万点の中で、およそ３０万点の修復が完了し、現在 7,300 点が展示されている。しかし、修復が済んでいないものも多数あり課題も多い。例えば番組の中でも紹介したが、インクで書かれたはがきを修復する手法は見つかっていない。熊谷さんは今後の技術発展を期待して、大事に冷凍保存したり、保管したりしており、この作業は今後も続いていくものなのだということは、作り手としても実感した。また、博物館でのデジタル展示についても、これからの課題のようだ。字幕と吹き替えについては、オリジナルの肉声や表情などをなるべく生かしたいという思いがある一方で、小さい画面で見

る視聴者の見やすさにも配慮し、場合によって吹き替えも実施したため、混在する形になった。

２０２３年 2月 国際放送番組審議会

２０２３年２月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第６９９回）は２１日（火）ＮＨＫ放送センター（ウェブ会議）で６人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「Dive in Tokyo」Yanaka － Building on the Past、「NHK WORLD PRIME」OKINAWA'S RETURN: 50 YEARS ON － Islands at Odds with Peace & Security － について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	永井　均	（歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授）
副委員長	阪田　恭代	（神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 教授）
委　員	遠藤　乾	（国際政治学者、東京大学大学院法学政治学研究科 教授）
委　員	坂野　晶	（一般社団法人ゼロ・ウェイスト・ジャパン 代表理事）
委　員	佐藤たまき	（古生物学者、神奈川大学理学部生物科学科 教授）
委　員	杉山　晋輔	（早稲田大学 特命教授、前駐米大使）

（主な発言）

＜最近の国際放送の動きについて＞

○　日本のウクライナ避難民を支援するロシア人親子の記事を、ウクライナ語でNHKワールド JAPANのサイトに掲載、SNSで周知したところ、ヨーロッパを中心に 900を超えるコメントが寄せられたと報告があった。この記事とコメントをきっかけに、新たに小さなコミュニティーができたということで、非常に興味深い。この記事とコメントは一般視聴者も見られるのか。また、2023 年度国際放送番組編成計画で「Kids Edutainment」の新設が紹介されていた。新たに教育番組に力を入れるという方針の実現だと思うが、これについては周知活動が重要だ。インターナショナルスクールや外国人の生徒を抱える国内の小・中学校へは働きかけているか。

（ＮＨＫ側）　この記事はNHKワールド JAPANサイトのウクライナ語ページに掲載しており、英語化もしている。コメントは、周知のためのＳＮＳ投稿に対するもので、一般視聴者には公開していない。

（ＮＨＫ側）　「Kids Edutainment」の周知方法については、今、検討しているところだ。まずは英語で放送し、その後多言語化してＶＯＤで配信したいと思っている。国内のインターナショナルスクールなどへの周知や、教育関連機関にも情報共有しようと検討しているところだ。

＜「Dive in Tokyo」Yanaka － Building on the Past

（6月２９日（水）9:30 ほか）

「NHK WORLD PRIME」OKINAWA’S RETURN:

50 YEARS ON － Islands at Odds with Peace & Security －

（１２月１７日（土）10:10 ほか）

について＞

○　２番組とも興味深く見た。「Dive in Tokyo」はクラシックな作りで、外国人の視点から見た谷中を紹介する番組だが、江戸から現在までの時間の推移を縦糸に、地域を支え続ける共同体の人々や営みを横糸におく、多面的なアプローチが新鮮で厚みのある番組だという印象を持った。また、共同体をまとめるファシリテーター的役割を持つ人が紹介されていて、例えば、民家を人が集う新しい場に作り替える建築家は、街にとって重要な存在だと思った。また、谷中を特徴づけている寺や、かつてそこに存在した川、その川を利用した染め物、昔からの味や古い家などを見ていくと人々の営みが生き生きと見えてきて、好感が持てた。こうした番組の価値は長くもつと思うので長い間楽しんでもらえるのではないか。

「OKINAWA’S RETURN: 50 YEARS ON － Islands at Odds with Peace & Security －」は、安全保障をテーマにした番組にありがちな、ニュース的、客観的で抽象的な表現、東京を主体とする見方から離れ、地方の視点で厚みを持って描かれている点がよい。安全保障の論理という形で具体的に地域に押し寄せる、少し残酷ともいえる現実を描けていると感じた。主人公の若者は、純粋に地元の人を助けたい、災害支援をしたいという目的で自衛隊に入隊するが、結果的に戦闘訓練を経て、銃を持ち、人を殺めるかもしれない存在へと変わっていく。その残酷な転換を映像化した番組だ。おそらく比較相対的に貧しいであろう基地周辺の人たちから、国防への忠誠を引き出す様が、静かに残酷に描かれていた。関連して、自衛隊に入隊する人たちの社会階層などが説明されればさらによかった。地場産業が少ない沖縄では、高卒の場合、自衛隊が相対的に魅力的な就職先だ。地元は地元で守るべき、といった論があることも、地域の抱える現実だ。番組では、沖縄ならではの、若者と祖母の世代の戦争観の違いもよく見えたと思う。

○　この２番組は、いずれも国際放送に加え、日本人視聴者にも見せるべきだと感じた。

「Dive in Tokyo」で掘り下げたのは谷中だが、以前から、日本人よりも外国人に人気がある場所だ。歴史があり、静かで落ち着いた町の風情と人々が好ましい、魅力的な地域で、安く美味しい食事ができる場所でもある。日本人にもここのようなよさに気づいてほしい。

「OKINAWA’S RETURN: 50 YEARS ON － Islands at Odds with Peace & Security －」も日本の若い人に見せる価値がある番組だ。沖縄と自衛隊、安保・防衛、領域主権などは、中立性を持って描くのはハードルの高い話題だが、バランスを取ってよく描けていると思った。自衛隊に志願した若い男性が、両親や祖母からかけられたことばには世代の違いを感じることができた。災害支援のために入隊を希望したが、

任務の１つとして法律上規定される、本土防衛の使命に直面する若者の、素直な反応がよく捉えられており、見る者の心に響く。また、返還時の元沖縄県知事、屋良朝苗氏の話などを通じて、沖縄の歴史や苦悩も描かれ、本土復帰５０周年を経た今、時宜にかなう、意味のある番組だと思った。

○　「OKINAWA’S RETURN: 50 YEARS ON － Islands at Odds with Peace & Security －」は、非常に価値の高い番組だが、出演者に対し、その後インターネットなどでネガティブな反応はなかったか気になった。特に国内で放送された場合に、そのようなリスクはないのか聞きたい。この番組を見て、各地域の課題の中に、地域の中に留まり、外部に知られないままのものも、まだまだあるのだろうとも考えた。また、番組の中で、沖縄以外の外部からの視点、例えば沖縄以外の地域の出身者（赴任して仕事をしている人など）の住民の視点も取材すると、さらに複合的に掘り下げることになり、客観的な厚みが増したかとも思う。「Dive in Tokyo」は、東京の持つ表面的なイメージを、さらに掘り下げようという趣旨で大変よい内容だ。東京は、大変キャッチーで魅力的なテーマだが、今後、ほかの地域で、その場所が持つイメージを覆すような、例えば意外にもデジタル最先端が地域に存在するなどのストーリーを発掘する番組ができるとよいと思った。

○　「Dive in Tokyo」は大変楽しい番組だった。東京の下町では、空襲で焼けなかった場所に古い建物が残っているが、市民の生活で使われ続けており、昔の生活が今に引き継がれている。観光用に造られた人工的な江戸時代の街とは異なる、そうした営みや風景が大変よく描かれていた。画面上の地図の表示は、土地勘のない視聴者には分かりにくく、歩いたルートが分かるような図にするなど、もう少し工夫があればよかった。

「OKINAWA’S RETURN: 50 YEARS ON － Islands at Odds with Peace & Security －」は、沖縄の抱える課題を考えさせられる重い番組だった。沖縄のほか、北海道でも自衛隊は普通の就職先として捉えられるが、首都圏の高校生や大学生で、将来の進路として自衛隊を挙げる学生はほとんどおらず、選択肢として存在しない印象だ。沖縄では、就職先が限られていることも影響しているのかと思う。番組の中で、もう少し社会的なバックグラウンドや、就職の選択肢などについても触れる機会があればよかった。

○　「Dive in Tokyo」は、外国人観光客に、東京のローカルに入ることで街の魅力を発見してもらえるよい番組だ。谷中は魅力的な場所の１つでよい選択だ。たとえばパリでも、さまざまな地区を周る人が多いが、同じように東京のローカルの魅力をさらにディープに見せるのは効果的だ。単なる観光情報ではなく、その地区の人、暮らしや文化など、日本社会の一端を描いていることが魅力的に映る。副題の「Build on the Past」のとおり、伝統を生かしてモダンに暮らす、ジャパニーズモダンなライフスタイルが紹介されている。英語を母語としない外国人も見るので、英語音声の部分にも字幕を出した方が親切ではないか。ナビゲーターのゼガさんは、シーンの合間で英語でも興味深いコメントをしているが、それが伝わらないのは残念だ。

「OKINAWA’S RETURN: 50 YEARS ON － Islands at Odds with Peace &

Security －」は、沖縄の復帰５０周年にあたり、重いテーマに挑んだ番組で、考えさせられる内容だった。アジアにおける安全保障で注目されるのが台湾海峡だが、最前線の１つである沖縄も緊迫した状況の下におかれている。その沖縄の視点が描かれたことに意義がある。また、日本人の若者２人の、戦争と平和の中で葛藤する視点が描かれたことも重要だ。日本は国家安全保障戦略を採択して防衛力を増強しており、一部の外国メディアは、日本が軍国主義に回帰しているという単純化されたイメージを発しているが、厳しい安保環境下で日本がジレンマを抱えていることが正しく伝わっている。副題の英語はやや分かりにくい。「at Odds with Peace & Security」は、平和とも、安保とも葛藤があり両方拒絶しているニュアンスになる。日本語のタイトル、「誰が島を守るのか～若き自衛隊員の葛藤～」の「葛藤（ジレンマ）」を活かしたタイトルにした方が内容が伝わるのではないか。さらにこの番組は若い世代にとって大事なテーマなので、若い視聴者にアウトリーチするには衛星放送よりも地上波での放送、あるいは動画共有サイトでの公開を検討した方がよいのではないか。

○　「Dive in Tokyo」は、短編ながら充実した内容で、視聴者を飽きさせない仕掛けが随所に見られた。「寺」「川」「愛」という３つのキーワードから谷中を読み解くことは視聴者の探求心を刺激し、番組進行において効果的だった。外国人視聴者に東京の知られざる魅力を伝えるだけでなく、日本の視聴者にも東京を再発見させる、今後、期待が持てる番組だと感じた。ナビゲーターのゼガさんは、案内が自然で、あたかも一緒に谷中の街を歩いているような気分にさせてくれる、適任の案内役だ。既にパイロット版として谷中のほか、蔵前や豊洲などのエピソードが作られているが、場所選びは、どのような基準によるもので、新年度からはどの辺りの地区が候補に挙がっているのか。可能な範囲で教えてほしい。また、日本語版を制作する予定はないのか。

「OKINAWA’S RETURN: 50 YEARS ON － Islands at Odds with Peace & Security －」は、沖縄返還５０年という節目に、沖縄駐留の自衛隊や平和と安全保障を取り上げ、沖縄の声を日本の内外に届けた、時宜にかなった内容だと思った。沖縄の市民と自衛隊との関係を巡る過去と現在が、沖縄出身の若き自衛官とその家族の目線で描かれている点が特徴だ。現在進行形の非常にデリケートな問題を扱っているにも関わらず、かなり踏み込んだ取材が実現したのは、素晴らしい。World News部が地元の沖縄局と連携し取材対象者の信頼をも得て、自衛官とその家族に密着取材できたことによるものだと思う。かなりチャレンジングな取材だったと思うが、取材時にぶつかった壁、困難などがあれば、可能な範囲で教えてほしい。また、英語版のタイトルと日本語版のタイトルが異なることには何か理由や狙いがあるのか。さらに、英語版と日本語版への視聴者の反応について、分かる範囲で教えてほしい。

○　「Dive in Tokyo」は、これまで知らなかった谷中の魅力に気付き、東京の持つ新たな魅力を認識できた。歴史的建造物や日本家屋のカフェやギャラリーへの転用、街並みを保存しようとする人々の地元への愛は、日本文化に関心のある外国人の琴線に触れたのではないか。ただ、谷中を京都の風情に例えた箇所については、京都の二番煎じと受け取られかねないので、むしろ京都以外にも多くの魅力ある街や文化があることを訴えるべきではないかと思った。目の肥えたリピーターの要求に応えるためにも、谷中以外の日本の地域を対象に、同様な番組を届けることが有効だ。古い家屋を

ギャラリーカフェに造り替えた建築家の宮崎晃吉氏が述べていたように、地域の痕跡と歴史を大事にしていくことが、日本の魅力を高めていくことになると再認識した。また、歌川広重の浮世絵に描かれた諏訪の台からの風景と現在の景色との対比は印象深く、特に新幹線や在来線が並走する様子は、海外の鉄道ファンにとっても魅力的な風景だと感じた。徳川幕府について、最初は「government」、後に「shogunate」と言い換えていたのが気になった。はじめに「government or shogunate」と言い、残りを「shogunate」と統一してはどうか。

「OKINAWA'S RETURN: 50 YEARS ON － Islands at Odds with Peace & Security －」は、ロシアとウクライナの戦争を契機に地政学リスクが高まる今日、日本の置かれた立ち位置がいかなるものか、海外の視聴者の理解を深める上で、質の高いよい番組だと評価する。視聴者は第二次世界大戦の惨禍を経て、平和国家に生まれ変わった日本を取り巻く国際情勢が大きく変化したこと、ロシア、中国、北朝鮮と国境を接する日本が欧州諸国と同等に切迫した問題を抱えていることを理解できたと思う。また、番組では問題が市民目線で提起されたことで、視聴者にとっても身近なものとして共有できたのではないか。沖縄の２人の若者の葛藤や、沖縄地上戦の実体験から命の尊さを説く祖母の姿には、国を超えて心を打たれる。また、訓練警報に緊張の表情を見せる与那国島の市民の姿に、戦時下のウクライナ市民を重ねて見る視聴者もいるのではないか。「誰が島の平和を守るのか」という問いへの探求が続くというラストコメントだったが、ぜひ続編を期待したい。また、ドイツが日本同様に大戦後、平和国家の道を歩み、戦前の国防軍から新しいドイツ連邦軍を組織した経緯を考えると、現在の地政学的リスクの高まりを、市民、特に若者がどのように受け止めているのかについて関心を持った。ドイツと日本を対比する試みがあってもよいかもしれない。

○　「Dive in Tokyo」について、案内役のゼガさんは本職がコメディアンで、ユーモアを交えた進行が番組のトーンを明るくしていて好印象だった。外国人にとって浅草などの観光地はなじみ深いが、谷中の情報は比較的少ないので、このようないわば穴場的な場所を紹介することの意味は大きく、歴史的背景や人々の生活を垣間見る部分など、バランスよく仕上がっていた。ただ、シャッター街の風景は、外国人の視聴者に衰退した下町という負の印象を与えた可能性もあると思う。多少、説明を加えてもよかったのではないか。

「OKINAWA'S RETURN: 50 YEARS ON － Islands at Odds with Peace & Security －」は、沖縄返還５０年の歴史を、戦争を知らない若い世代の自衛隊員の視点を通して描く、クオリティーの高いドキュメンタリー作品だ。歴史的な映像や戦争を経験した高齢者のことばも交えることで、沖縄の過去と現在が交差し、見応えのある番組だった。中国・台湾有事、北朝鮮からのミサイル、ウクライナ戦争という地政学リスクの高まりを多くの人たちが体感しているタイミングで、このような番組を放送する意味は大きいと思う。

（ＮＨＫ側）　「Dive in Tokyo」は、2023 年度の定時番組化を目指して、今年度、2022 年度に蔵前、谷中、神田川、豊洲という４本のパイロット番組を制作し、さまざまな演出スタイルを試しながら取り組んできた。最近、動画共有サイトで番組を公開したところ、公開してすぐに再生が増え、中でも

神田川の回は特に反響が大きかった。あらためて東京への関心が高いのだと感じた。海外のモニターからは、「東京にこのような場所があったことにすごく驚いた」「番組をゆったりしたペースで見られた」「コミュニティーの歴史が分かっておもしろかった」というような、好意的な意見があった。日本国内の視聴者にも興味深く見てもらえる番組ではないかと思うので、国内放送の可能性も検討していきたい。ほかの地域でも、類似の企画が考えられるとよいとも考えている。地図はこれから出し方を工夫していくべき部分で、東京を知らない人にも視覚的な助けになるよう、検討していきたい。場所の選択について、コロナ前から観光で訪れる人が多く、親しみがあると思われる場所を選んでいる。また、知られていなくても、訪問して発見がある場所も発掘していきたい。

（ＮＨＫ側）　この新番組では、東京の知られざる魅力を多くの方に知ってもらうという、責任を担っていると感じており、今後も気を引き締めて制作に当たっていきたい。

（ＮＨＫ側）　英語字幕について指摘があったが、現在一部の番組で、英語のトランスクリプトをつけるサービスを試行している。新年度からはオンデマンドサービスの全ての番組について、オプションとしてボタンをクリックすると、字幕が出てくるというサービスが付加される予定だ。

（ＮＨＫ側）　「OKINAWA’S RETURN: 50 YEARS ON － Islands at Odds with Peace & Security －」は、英語で２回、３０分版と４９分版を放送し、日本語でその３０分版と４９分版をＢＳ１でも放送した。インターネットでは、賛否両論、いろいろな反響があった。ただし、出演者を誹謗中傷するような声は見当たらず、英語放送でも日本語放送でも「若い人たちに共感する」、「祖母との会話がものすごく心にしみる」や「日本や沖縄の状況がよく分かった」という好評意見を多く得ている。

（ＮＨＫ側）　沖縄で３４年前に自衛隊を取材して以来、現在まで記者として自衛隊取材を継続している。復帰５０年に当たり、沖縄で自衛隊がどのように変わっているのかという問題意識で取材を希望した。以前の取材でつながった自衛官を通してアプローチし、許諾を得ることができた。新隊員の密着取材は沖縄では初めてのことだったが、親が自衛官ではなく自分の意志で入隊した隊員を紹介してほしいというリクエストが受け入れられ、内定式の日から取材をスタートして、一年間密着した。家族の取材についても、取材の中で沖縄戦の経験者である祖母や、台湾出身の母親につながることができ、特に大きな壁を感じることはなかった。沖縄では、自衛隊に対するネガティブなイメージがあるので、密着取材への懸念が示されるのではないかと思ったが、そのようなことはなく、沖縄局との連携で、さまざまな訓練の現場で取材を重ねることができた。緊迫する国際関係を反映し、教える側の意識も変化しており、仮想敵を明らかにした上での教育訓練や、

実地訓練が、数十年前のものと大きく変化していることも見えた。地上波での放送も、機会があればできるとよいと思う。主人公の２人については、折々に取材するなどして、続編につなげることもできるかもしれない。

２０２３年 １月 国際放送番組審議会

２０２３年１月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第６９８回）は１７日（火）ＮＨＫ放送センター（ウェブ会議）で７人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「NHK WORLD PRIME」Art is Our Voice、「Culture Crossroads」Southeast Asian Memories of Hiroshimaについて説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	永井　均	（歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授）
副委員長	阪田　恭代	（神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 教授）
委　員	遠藤　乾	（国際政治学者、東京大学大学院法学政治学研究科 教授）
委　員	坂野　晶	（一般社団法人ゼロ・ウェイスト・ジャパン 代表理事）
委　員	佐藤たまき	（古生物学者、神奈川大学理学部生物科学科 教授）
委　員	杉山　晋輔	（早稲田大学 特命教授、前駐米大使）
委　員	仲本　千津	（社会起業家、㈱ＲＩＣＣＩ ＥＶＥＲＹＤＡＹ 代表取締役ＣＯＯ）

（主な発言）

＜最近の国際放送の動きについて＞

（ＮＨＫ側）　まずは、「国際放送は日本の視点をどこまで意識しているか」という先月の審議会での質問について、補足説明をしたい。

ＮＨＫワールド ＪＡＰＡＮの立脚点は、“日本・アジアの視点から世界に発信する国際公共メディア”だと考える。ただし、“日本の視点”にはさまざまな解釈があり、具体的な表現方法は、番組ごとに異なる。日本に直結するテーマもあれば、普遍的なテーマを扱う番組もあり、報道番組、情報番組や文化、芸能番組などジャンルの違いもある。制作サイドでは、常に、それぞれの番組で適した表現を追求しており、チャンネルとしても、個々の番組の多様性、創造性を大事にしつつ、ＮＨＫ　ワールド ＪＡＰＡＮトータルで、日本やアジアの視点がバランスよく伝わるよう、編成の設計、コンテンツの品質管理に取り組んでいる。日本の立場や魅力をストレートに伝える方法のほか、事実を淡々と描き、間接的に視点を表現する場合もある。編集の過程で表現される視点も含めて、さまざまな形でニュースや番組に日本らしさが反映されていると考える。今後も適切なあり方やバランスを、視聴者の声に耳を傾けながら探っていきたい。

来年度の国際放送番組編集の基本計画でも、重点事項の２番目に「日本・アジアからの多様な視点」を挙げた。また、「世界で対立や分断が深まり、一

方的な見方や情報も飛び交う中、公平・公正で信頼される情報の発信を強化」する編集方針を示した。ポジショントークを排して、フラットに情報を伝え、白か黒かでなく多様な事実や考え方を伝えることも日本らしい視点であり、信頼につながるポイントとして大事にしている。

１２月の審議会で意見交換した番組、“Conveying the Horrors of War: Ukraine‘s Frontline Journalists”も、取材のアプローチや表現に、日本ならではの視点が現れたと捉えている。ウクライナ戦争の悲劇には既視感がある、という指摘もあったが、ジャーナリストの目線から描いた点は、ほかにない特徴だと思う。背景には、ＮＨＫがウクライナ公共放送創設当初から、協力・支援を続けてきたことによる両者の信頼関係があり、世界のメディアで唯一、放送局の密着取材を許された。力による侵略には明確に反対しつつ、ジャーナリストの葛藤を通して、この戦争にも白黒だけではなくグレーの部分もあることを伝えようとしており、その経緯と伝えたメッセージには、広い意味で日本らしい視点があった。ただし、ノーナレーションの手法を採ったこともあり、狙いや背景を伝え切れず、改善の余地があったことは指摘のとおりだ。今後も個々の番組、またトータルで、日本の視点をどう出していくべきか、議論を積み重ねたい。

○　ウクライナ公共放送とつながりがあったことを、番組の中できちんと伝えていれば、ＮＨＫならではの特徴がはっきりしたのではないか。今後に期待したい。

また、１２月のニュースを振り返ると、日本の国家安全保障戦略文書の発表があった。この戦略のねらいが、どのように誤解なく伝わるかが重要だ。平和国家日本として、平和のための戦略を練る、という大前提の姿勢を伝えなければならない。中国、ロシアの国営ニュースなどでは、岸田・バイデンサミットを含めて、新しい戦略を批判する論調があり、より積極的に、自らのことばでねらいを伝えていくべきではないかと思う。１月１６日の「NEWSROOM TOKYO」にワシントン・カレッジのアンドリュー・オロス教授が出演し、「日本の防衛戦略や日米のアライアンスの目的は戦争を起こさないことであり、抑止にある」と解説していた。今後も日本の立場が正確に伝わるように報道してほしい。

＜「NHK WORLD PRIME」Art is Our Voice　（１０月１日（土）１０:１０ ほか）
「Culture Crossroads」Southeast Asian Memories of Hiroshima
（１１月２１日（月）１０:４５ ほか）　について＞

○　番組の中で日本の立場や視点をより明らかにしてほしい、という先月の審議会での発言に対し、ＮＨＫ側の補足があったことはよかったが、まだ十分ではないと感じた。ただし、今回の「Art is Our Voice」「Southeast Asian Memories of Hiroshima」の２つの番組は、日本発のクリアなメッセージがあり、高く評価できるよい番組だった。

「Art is Our Voice」は、ウクライナのバレエダンサーたちが、日本の理解ある

人たちの協力を得て、日本で公演を行う様子を描いている。バレエだけで問題が解決するわけではないが、芸術や文化が持つ力に着目した点は日本にふさわしい視点で、力強いメッセージとなった。特に、今回の公演がデビューとなった２人の若いダンサーのストーリーが印象に残った。

「Southeast Asian Memories of Hiroshima」は、被爆した東南アジアからの留学生について、インドネシア出身のアナウンサー自身が伝えた番組で、広島の原爆を新しい視点でとらえた点がよかった。わずか１０分の番組だが、極めて簡潔かつ明確で、メッセージがよく伝わった。知らない事実もあり印象深く、今年５月にＧ７広島サミットが開催される点でもタイムリーなテーマだと思う。

○　両番組とも心に残る内容だった。「Southeast Asian Memories of Hiroshima」では、東南アジアからの留学生で被爆した人たちがいたことを初めて知った。１０分という短い時間の中に多くの情報が入っているにもかかわらず、大変よく整理されていて、充実していた。

「Art is Our Voice」は、公演のシーンで、涙がこぼれ、感動した。日本人とバレエのつながりを国際的に認識してもらうとともに、ウクライナのバレエ団への支援について発信できたこともよかった。ウクライナの人の英語のアクセントに慣れていないせいもあって聞き取りにくい部分があった。重要な箇所には字幕を入れるか、ナレーションで補完できればよりよいのではないか。

○　「Art is Our Voice」について、バレエ鑑賞がほぼ初めてだったこともあり、バレエそのものの魅力を大いに感じた。ウクライナとロシアの戦争の中実現した公演ということ、その中でダンサー自身が果たす役割への思い、葛藤にも深い意味を感じた。

「Southeast Asian Memories of Hiroshima」では、東南アジアからの留学生に被爆者がいたことを知り、新しい視点を得て、勉強になった。両番組とも、初めて触れるもの、知ることが多く、学びが多かった。すでに日本語でも展開されているのかもしれないが、多くの人にぜひ見てもらいたい。

○　２つとも、高く評価できる番組だ。「Southeast Asian Memories of Hiroshima」は、広く知られていない事実も含めて掘り下げており、原爆投下という極限状況においても残っているヒューマニズムを描いているのに対して、「Art is Our Voice」はより緊張感があり、特に印象に残った。トップダンサーのアンナ・ムロムツェワさんのことばにもあったが、通常、スポーツや文化は政治から切り離されるべきだと位置付けられているが、攻撃され、身一つで国を出ざるをえない状況下で、沈黙しているのは難しい。バレエを通して観客と感動を共有している日常的世界から、かなり激しい政治性を帯びる世界に踏み入らざるを得ない。芸術自身がメッセージになるということだ。日本が、芸術の支援という形で関与しているということにも政治性があり、ピンと張りつめたような緊張を感じる番組だった。このような芸術によるメッセージに触れ、掘り下げたところを高く評価したい。

○　両番組とも優れていたが、「Art is Our Voice」は特によかった。多様な世代のバレエダンサー、支援者が紹介されたことで広い世代の共感を呼ぶことができた。ま

た、文化と政治という、通常、日本にいるとなかなか踏み入れない領域で問題提起がされている点もよかった。国内でも放送し、オンラインも含めて、視聴機会が増えるとよいと思う。

○　「Art is Our Voice」について、ウクライナバレエの美しさや気高さを感じるとともに、個々のダンサーが心の内に抱える痛みや葛藤、それを乗り越えようと苦闘する姿に、心を打たれた。ロシア侵攻下にあるウクライナ人の生の声を視聴者に届けた点でも、貴重な証言記録だと感じた。番組の重要なメッセージの１つは、仲介者の役割ではないかと思う。ウクライナ国立バレエの芸術監督を務める寺田宜弘さんと母の美智子さんの存在だ。ウクライナの若者に愛情を持ち、よりよい未来を願って支え続ける２人の姿に尊さを感じた。寺田さんという日本人の存在を海外の視聴者に知らせた点も、この番組の意義ではないか。タイトルが印象的で引きつけられたが、どのような経緯で決めたのか知りたい。アンナさんの発言に着想を得たと思うが、バレエや踊りではなくて芸術、アートという普遍的なことばを選択した理由を知りたい。

「Southeast Asian Memories of Hiroshima」は、南方特別留学生の歴史と彼らの生活、広島で留学生たちを支えた日本人女性との交流について、留学生の家族や当該日本人女性を結び付けて紹介した、短編ながら非常に優れた作品だ。戦争経験のないNHKワールド ＪＡＰＡＮ ラジオのインドネシア人アナウンサーのアジ ロハディさんが制作に携わったことがポイントで、インドネシアと日本、戦争世代と広い意味での戦後世代をつなぐ、橋渡し役になっている。南方特別留学生の存在や被爆については、ロケ地になった広島でも十分には知られていない。国内向けに日本語で放送する計画はないのか。日本人以外の人々の原爆経験を知ることは、被爆米兵の問題も含めて、日本の戦争を知ることにつながる。また核攻撃の無差別性に対する認識を改めて促すという点でも大切だと思うので、可能であれば国内放送も検討してほしい。

○　「Art is Our Voice」は、テーマがタイムリーであり、ウクライナ問題、ウクライナと日本の関係がはっきり提示されていてよかった。日本人とのつながりの深さ、寺田親子のような支援者の存在について、勉強になった。日本人、日本の視点、貢献を印象付けられたストーリーであり、地上波でも多くの人に見てほしい。公演した１６都市と連携して番組ＰＲを工夫するなど視聴者をより増やす取り組みもしてほしい。

「Southeast Asian Memories of Hiroshima」について、１０分の中で、大変濃いストーリーを作ったことは高く評価したい。インドネシア人アナウンサー、ロハディさんによる報告という視点が新しい。2016 年のオバマ元大統領の訪問時に、アメリカ人や韓国人など外国人の被爆者について話題になったが、Ｇ７に向け、東南アジアも含めて広島、長崎での被爆者のグローバルなストーリーとして、展開を続けてほしい。また、NHKワールド ＪＡＰＡＮは日本・アジアの視点から世界に発信する国際公共メディアだ、という説明があったが、届ける先としてもアジアを意識し、戦略を強化してほしい。

（ＮＨＫ側）　「Art is Our Voice」の国際放送の後、ツアー終了後の最新取材を含めた日本語版を制作し、ＥＴＶ特集として２回放送した。その後、前・後編からなる、総尺９９分の番組に再編し、ＢＳ１で３回放送した。広報が

足りず、話題として広がっていなかったとすれば反省点だ。多くの視聴者から、また、委員からも、感動した、涙が出た、などの反響を聞き、メッセージが心に届いたことを知ることができた。ダンサーは、戦況や、父親など身近な存在の無事を心配しながら、舞台では笑顔で踊り続けるという極限の状況だったが、そうした不安を共有し緊張しながらの取材だった。開戦後、避難先にいたダンサーたちに、メッセンジャーアプリや携帯電話でインタビューをしたが、どんな状況下でも、プーチンやロシアに対する憎しみを直接口にすることはなく、芸術家として、踊りをとおして日本の人たちにメッセージを発したい、という強い意志を感じた。番組を見た人にその緊張感や思いが届いたのではないか。タイトルには、主人公の一人、アンナさんの発言、「Art is Our Voice」を引用した。舞台に立って表現するアートにすべてのメッセージを込めたいというアンナさん、バレエ団の気持ちが、タイトルにつながった。寺田さんの母の美智子さんが校長を務める京都のバレエスクールが 1975 年に姉妹校提携をして、バレエ団と深い交流があることは取材を始めてから知った。日本でのツアーには、困難があっても絶対に行きたい、とダンサー全員が言ったという、その背景には、ウクライナと日本の、長い間の心の交流があった。両者の絆やドラマを、世界と日本の人々に伝えることができてよかった。

（NHK側） 現在も取材は継続している。先日も総合テレビ「おはよう日本」で寺田さんのインタビューを放送したが、取材時に「ウクライナは芸術があって国がある」ということばがあった。ウクライナは長い激動の歴史の中で、一切芸術を諦めず、１月現在も、空襲警報が鳴る中で、週２回バレエ、週１回オペラを公演している。芸術が自分たちの生活の中心にある、と感じる国民にそれを提供するのが務めだと考えていて、芸術家であることを自分たちの誇りとして生きていることがよく分かった。翻って日本で、また視聴者にとっての、芸術の意味、大切さを考えるきっかけにしてもらいたい、という思いもあった。

（NHK側） 「Southeast Asian Memories of Hiroshima」の制作は、インドネシア語放送のアジ ロハディ アナウンサーをはじめ、東南アジア出身のアナウンサーが、同胞の被爆者について取材したいと声をあげたことがきっかけだ。ウクライナの戦争が続く中、被爆者の話を日本から発信する意義も大きいと考えた。制作者たちには、東南アジアの視聴者に戦争を自分事として考えるきっかけにしてもらいたいという思いがある。また、日本と南方留学生のつながりが今も残ることを伝え、原爆は単なる過去ではないと感じてほしい。１０分の番組では時間に限りがあるが、１２月８日のニュース番組「NEWSROOM TOKYO」では、アジさんによるスタジオ解説を加えて放送した。真珠湾攻撃から８１年の日に放送することで、ウクライナの戦争や、５月のＧ７広島サミットにつながるメッセージにもなったのではないか。アジさんのナレーションによるインドネシア語版も制作し、オンラインで公開している。国内放送の予定は未定だが検討したい。

（ＮＨＫ側）　２本の番組では、日本の視点がしっかり出ていたと評価があった。これらのような、日本を舞台にした、知られていない事実の発掘を含む日本ならではの番組は、ＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮの柱として、今後も制作していく。同時に、視聴者の中には、ニュートラルで信頼できるメディアを求めているという人もいて、日本が個別の番組で出てくるのはよいが、過度な日本色は望まない、という意見もある。さまざまな意見に真摯に耳を傾け、トータルでバランスが取れた、質の高い発信を目指していきたい。

２０２２年１２月 国際放送番組審議会

２０２２年１２月のNHK国際放送番組審議会（第６９７回）は２０日（火）NHK放送センター（ウェブ会議）で１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。その後、「２０２３年度国際放送番組編集の基本計画（案）」の諮問にあたり、説明があった。

審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。引き続き、「Conveying the Horrors of War: Ukraine's Frontline Journalists」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	永井　均	（歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授）
副委員長	阪田　恭代	（神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 教授）
委員	遠藤　乾	（国際政治学者、東京大学大学院法学政治学研究科 教授）
委員	坂野　晶	（一般社団法人ゼロ・ウェイスト・ジャパン 代表理事）
委員	杉山　晋輔	（早稲田大学 特命教授、前駐米大使）
委員	中曽　宏	（㈱大和総研 理事長）
委員	中村　勇吾	（インターフェースデザイナー、tha ltd. 代表）
委員	仲本　千津	（社会起業家、㈱ＲＩＣＣＩ ＥＶＥＲＹＤＡＹ 代表取締役ＣＯＯ）
委員	新浪　剛史	（サントリーホールディングス㈱ 代表取締役社長）
委員	村上由美子	（ＭＰｏｗｅｒ　Ｐａｒｔｎｅｒｓ ゼネラル･パートナー）

（主な発言）

＜最近の国際放送の動きについて＞

○　動画共有サイトのNHKワールド　ＪＡＰＡＮ公式チャンネルの登録者が 200 万人を超えたことが報告されたが、この顕著な増加は、国際放送のリーチ増加に、よい効果が出るのではないか。また、登録者数の男女比が説明されたが、統計上、第３の選択肢はあったのか。第３の選択肢についての配慮への考えを聞きたい。

（NHK側）　登録者数の内訳は動画共有サイトのプラットフォームによる統計の引用だ。設問にどのような選択肢を設定するかは動画共有サイトの方針による。

（NHK側）　NHKワールド　ＪＡＰＡＮでは、視聴者からコメントをいただくメールフォームで、女性、男性に加え「それ以外」という選択肢も設けており、選択肢には配慮している。

＜「２０２３年度国際放送番組編集の基本計画（案）」について（諮問・答申）＞

○　国際放送局長からの説明と、先月の審議会の意見交換も踏まえて、「２０２３年度国際放送番組編集の基本計画（案）」は、原案どおり可とする答申をしたいが、異議はないか。

○　異議なし。

○　原案を可とし、答申することにする。

（NHK側）　番組審議会で答申を得たので、この後、この「基本計画案」を１月の経営委員会に提出する。経営委員会の議決が得られたら、来年度の具体的な番組編成を決定し、２月の番組審議会で「２０２３年度国際放送番組編成計画」として改めて説明する。

＜「Conveying the Horrors of War: Ukraine's Frontline Journalists」
（１１月２０日（土）１０:１０ ほか）について＞

○　日本のメディア全体、特にNHKの報道関連番組の質はとても高く、この番組も内容が濃く、戦争の悲惨さをよく伝えている点で高く評価する。しかし、日本から英語で発信するジャーナリズムとして見た場合、国際社会に何を伝えようとしているのかが分からない。戦争の悲惨さを当事者から聞き出し、共有し、今後起きてはならないという理解を広めるだけでは、日本発の放送として足りないのではないか。世界の視聴者には、ウクライナでの戦争の悲惨さは各メディアから伝わっていると思うが、そのうえで日本は何をすべきなのか立ち位置が見えず、国際社会にその立場を知らせる役割は果たしていなかった。日本がこうした戦争をどのように考えているか、それをジャーナリズムとして発信するにはなど、国内で根源的な議論が足りないための問題とも考えられるが、あえて批判的な見解として意見させてもらう。

○　身近なところで罪のない市民が命を落としていく戦争の恐ろしさを伝えるという目的は達せられていると思った。ウクライナのジャーナリストの目を通して、現場から届けられる肉声には迫力と重みがあり、特に2児の母である、ウクライナの公共放送ススピーリネのアナスタシーア・オブラスヴァ記者が、子どもたちの死を悼むことばや亡くなった少年の最期の様子を明らかにしようとする姿勢には胸を打たれた。また、真実を伝えようとするウクライナのジャーナリストの勇気と気概のほか、戦争の当事者となったがゆえにわき起こる愛国心や敵がい心、ジャーナリズムに本来求められる中立性、独立性、真実を伝えるために何かを犠牲にしなければならない難しさも実感した。また、ススピーリネのミコラ・チェルノティツキー会長が「中立性が保てたか

どうか、戦争が終わってからでないと評価できない」と述べていたのが印象に残った。この点、ＮＨＫは第三国の公共報道機関として、中立的な立場を生かして、もう少し真実に迫る役割もあるのではないか。ナレーションを排した手法からは肉声の迫力と重みは伝わってきたが、字幕を追うことで映像を追い切ることができない点はデメリットだ。戦争の恐ろしさに加え、このような状況に付随するトレードオフのような問題を視聴者に起し、考えを深めることを促すためには、節目で問題を整理し、提起するナレーションがあった方がよかったのではないか。

○　ノーナレーションで編集しているのが、ＮＨＫの番組としては新鮮だ。自分で戦時下の放送局に赴いて、できごとを体感しているようなリアリティーを感じた。戦争の中で、両陣営からいろいろなニュースが飛び交っている中、状況を視聴者が自分自身で判断する力を得るしかないというような考えを示す材料になるのではと思った。ウクライナの放送局の人たち自身が自分たちの中立性に疑念を持ちながら、とにかく進むしかないと言っていた内容も含めて、自分の身に起きたらどう判断するのか深く考えさせるメッセージがあるのではないか。この番組は、メディアの中立性や当事者性が大きなテーマだと感じた。日本が戦時下になることがあったらどのような行動指針を持つべきなのか、この番組から必然的に自分たちに問われるテーマであると思うので、別の番組になるかとは思うが、ＮＨＫとして伝えてほしいと思った。

○　ジャーナリストから見た戦時下の状況という切り口は新しく感じ、興味深く視聴した。全体的に、戦争についての映像や話は、既に別の番組で見た内容だったという印象で、新しい情報や学びを得られたわけではなかった。ジャーナリストとして中立性をいかに保つか、ロシア側から出てくるフェイクニュースとどう戦っていくのか、ジャーナリストとしての独自の観点に着目するのであれば、彼らがこの戦時下において抱いている葛藤をより深く浮き彫りにできれば、より一層の学びにつながったのではないか。

○　１人のジャーナリストを通して、プロフェッショナリズムの中立性と感情の葛藤に悩む人間的な部分が、番組の中で表現されていたので興味深かった。今回のウクライナの番組、そしてほかの番組も、ＮＨＫの国際放送局で作っている番組で、日本の立ち位置ならではの差別化というものをどこまで制作する際に意識しているのか聞きたい。日本ならではの報道は、特に今回のような番組の制作に関して、メッセージとして意識されなくてもよいものなのかどうか、方針があれば説明して欲しい。

○　とても勉強になった。ただ、ＢＢＣをはじめとして、さまざまなメディアで日常的に伝えている話でもあり、ヨーロッパでは身近な問題として多様な情報が届いていると思う。日本のＮＨＫとして、どのような特色を出したかったのか。「日本のなすべきこと」ということよりも、平和を重んじる日本としての立場など、なんらか特色を出して差別化しないと、「おもしろい」で終わってしまう可能性がある。プラスアルファが何かあれば、日本のＮＨＫ、日本が海外へ発信している番組としての価値が上がるのではないか。今後、ぜひ議論して、何かしら付加価値を付けたらよいと思った。

○　ＣＮＮなどの主要放送局でなく、ウクライナの小さな公共放送局にグローバルに発信する力を与えたことは評価できる。他方、「日本のメディアとして、どこにこだわるのか」という点があまり出てこなかった。また、ナレーションを排して編集したことについて、説明上重要な点はナレーションを入れるべきではなかったか。例えば、ススピーリネのミコラ・チェルノティツキー会長のインタビューを紹介したシーンで、字幕のみの説明で「Suspilne is state funded, but its board of directors is appointed by a third－party organization.（ススピーリネには国家予算が投入されているが、理事は第三者機関が任命している）」とあったが、これは非常に大事な部分であり、字幕処理でなくナレーションを入れるべきではなかったか。ナレーションを入れず編集する番組的効果は理解するが、論点をはっきりさせる部分を字幕のみで示すのは無理があるので、配慮した方がよいと思う。さらに、アメリカの公共放送ＰＢＳと戦略的に提携して、今月から来年１月にかけて放送予定とのことだが、どのような反響があるのか聞きたい。同時に、アジアの公共放送としては、ヨーロッパに比べて距離が遠く、理解を深めるための材料が比較して少ない可能性のあるアジアを対象に、ウクライナの放送番組を戦略的にシェアするということも大事なのではないか。

○　番組が５０分と長く内容が濃いので、ナレーションがなく字幕だけで進行することによる負担感は大きかった。全員がしっかり英語を読めれば問題ないが、特に若い世代でショートビデオの視聴に慣れている視聴者には、重要なポイントを理解してもらうための工夫が必要だと思う。ナレーションを選択的に入れる、字幕を伝わりやすいものに変えるなど検討の余地がある。

○　戦争の悲惨さを伝えるという番組のトーン自体が日本らしさではないかと感じた。つまり戦後日本が培った平和主義がこのような形で表れ、むしろ国策として日本がどういう視点なのか、いわゆるナショナリズム的視点が後景に退き、戦争の悲惨さが前面に出ること自体が日本の特徴ともいえる。また、ジャーナリストの視点を取り入れた点は興味深かった。女性ジャーナリストの視点を通じて戦争を見るという点が、この番組のセールスポイントでもある。ＮＨＫの番組は報道の自由などを含めてこだわりがあり、記者が抑圧を感じたときなどは結構よい番組を作ると感じている。この番組は、やはりジャーナリストの視点を通じてものを見るという点で、恐らくＮＨＫの取材者が感じているさまざまな悩みなどが踏襲されていると感じる。ジャーナリストの視点を通じて見ることにどんな意味を見出すのかを考えると、作り手の悩みも重ねて見えてくるので、視聴者にその点がわかると深みやおもしろみが増すのではないかと感じた。さらに、戦争一般が悲惨だという事実と、戦争にも個々の事情によるグラデーションがあるというリアリティーにも関心を向けてはどうか。例えば今回の戦争はウクライナ側にとっては勝たなければならず、積極的に戦っている戦争という見方になる。戦後の日本の平和主義から見ると、戦争は悪と一色になってしまいがちだ。番組の内容を超える論点ではあるが、日本のメディアや社会での戦争のとらえ方と戦争のグラデーションについては結構深い議論になる話でもあると思って見た。

○　ススピーリネの記者の視点を取材しているＮＨＫの取材者自身の葛藤や悩みも理解できると、意味が深まるという意見と少し近いのだが、担当者とススピーリネの記者のやり取りに興味を持った。ほとんど出てこなかったが、番組に加えられる要素があれば、内容を深められたのではないかと思う。また、既にアメリカで放送されているということだが、アメリカの視聴者からの反応についても知りたい。

（ＮＨＫ側）　国外で起きていることを自分たちの問題として多くの視聴者に見てもらうことが非常に難しくなっている中、ウクライナの問題は特異な傾向を示している。独自の視点や深く関わりできごとに向き合っている人たちの声を直接伝えていくことで、多くの視聴者に何が起きているのかを届け、考えてもらえる。今回の番組では、ジャーナリストの視点で戦争を見ることで、これまでと異なるリアリティーを届けられるのではないかと考えた。また、ジャーナリズムは客観的であることが求められる中、自国で戦争が起こったらどうなるのか、難しい体験の最中にいる同僚ジャーナリストたちのごく近くでその体験を記録できることが貴重な経験であるということも感じていた。その貴重な経験を視聴者にも届けたかった。ススピーリネでの取材は今後も続くので、戦争の推移とともに何をどのように伝えていくのか、当初の発意から伝え方も進化させる必要があると考えている。

日本のジャーナリストとしてススピーリネで記録を続ける理由については、ススピーリネのジャーナリストと深く意見交換をしている。第二次世界大戦時に、中立性・独立性を保てず、自らの取材で、自らが確信を持った報じ方を十分にはできなかった、また、最近の経験では、東日本大震災の原発事故の際、何が起きているのか自分たちで 100％確認できない中で、報じられる内容が限られ、あとから振り返れば内容にも反省すべきことがあったという思いもある。国民の多くが混乱状態に陥るような状況を目の当たりにしたときに、どの情報を信じて、何に基づいて報じていくのか、ススピーリネで進行する決断や葛藤、すべてを知りたいということを伝え同意をもらっている。ゼレンスキー政権は、公共放送に対して取材規制もかけ、例えばＢＢＣやＣＮＮが被弾した直後の現場から中継をする中、敵の攻撃の正確性の評価につながる可能性があるという理由でススピーリネに中継許可はせずススピーリネもそれを受け入れるということもある。政府の規制と公共放送の決断についても近くで聞くことができる、そのようなススピーリネとの関係を築けたのは、取材に入ったディレクターが日本のメディアとして、日本人として記録することの意味をススピーリネと共有できたことが大きいと思っている。指摘いただいた点は、これから継続的に取材していく中で、ぜひ生かしていきたい。

（ＮＨＫ側）　“ウクライナの公共放送の経験を記録し、視聴者がリアリティーをもって自分ごととして考え、公共放送のジャーナリストとしても深く考えるきっかけとする”というテーマに共感し、海外発信したいと考えた。一方、

日本人として、日本のメディアとして伝えられることにこだわって内容を深めるべきという意見についても理解できる。今後の取材や番組制作に生かしていきたい。

番組では、ナレーションはなくし、出演者のことばで伝える「ノーナレーション」にした。ウクライナ語に英語の字幕を付ける伝え方が、視聴者のストレスになったことは否めない。情報を整理し、重要な論点を受け止めてもらうためには、ナレーションを加えることも効果的かもしれない。ただ、視聴者からは、ナレーションがないことでよりリアルに感じたという意見も届いているので、今後も検討を重ねたい。

アメリカの視聴者の反応は、届いたところで改めて報告できることがあればお伝えする。

２０２２年 １１月 国際放送番組審議会

２０２２年１１月のNHK国際放送番組審議会（第６９６回）は１５日（火）NHK放送センター（ウェブ会議）で７人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。その後、「２０２３年度国際放送番組編集の基本計画（案）」について説明があり、意見交換を行った。引き続き、「Ethical Every Day Episode3: Enjoying Meals with Less Waste」、「Rene Goes to School」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	岡田　亜弥	（名古屋大学大学院国際開発研究科 教授）
副委員長	阪田　恭代	（神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 教授）
委　員	坂野　晶	（一般社団法人ゼロ・ウェイスト・ジャパン 代表理事）
委　員	佐藤たまき	（古生物学者、神奈川大学理学部生物科学科 教授）
委　員	永井　均	（歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授）
委　員	仲本　千津	（社会起業家、㈱ＲＩＣＣＩ ＥＶＥＲＹＤＡＹ 代表取締役ＣＯＯ）
委　員	村上由美子	（ＭＰｏｗｅｒ　Ｐａｒｔｎｅｒｓ ゼネラル･パートナー）

（主な発言）

＜最近の国際放送の動きについて＞

○　ウクライナ侵攻開始直後の３月から休止していたロシア語の「リスナーズフォーラム」を８か月ぶりに再開し、月１回放送、文化的話題のほか報道的な内容も取り上げようとする姿勢を高く評価したい。日本で暮らすロシア人が、社会に溶け込めるよう、番組でも、社会の一員として声を聞くことが大事だ。Ｊアラートについての報告もあったが、日本人でもＪアラートについてまだよく分からない点がある。在留外国人や外国人観光客への伝え方については今後の課題として取り組んでほしい。

（ＮＨＫ側）　今年に入り２回Ｊアラートが出ているが、両方ともＮＨＫワールドＪＡＰＡＮでは、速やかに国内の画面を使用して、英語で「ミサイルが発射され日本に向かう可能性。避難してください」という字幕スーパーを表示し、アンカーが情報を伝えた。また、アンカーがいない時間の場合は同じ内容の自動音声を繰り返し流すことにしている。基本的に国内放送と同じ対応だ。字幕や自動音声に加え、常時待機している通訳者に、国内放送を同時通訳してもらう対応もとっている。原則として津波警報などと同じような対応と考えてほしい。

○　避難といっても地震の場合は「外に出てください」だが、ミサイルの場合は「中に入ってください」となる。家なのか、どこに避難するのか。地下鉄がない地域もあるので、さまざまなシナリオを考えて「避難」という意味が正確に伝わるよう、放送していく必要があるのではないか。

○　Ｊアラートの報道については、今後、観光客やインバウンドが増えることを考えると、さらに充実、改善していく方法を議論すべきだ。今回のＪアラートでは、英語で的確に発信し、多言語でも発信した点は評価できる。さらに、例えばＱＲコードを出して、それぞれが使っている言語にすぐリンクできるなどの工夫も考えられるのではないか。

（ＮＨＫ側）　ご指摘のとおり、まだまだ改善すべき余地があると思うので、引き続き検討を続けていきたい。

＜２０２３年度国際放送番組編集の基本計画(案)について＞

○　冒頭に全体の基本方針の重点項目が要約され、従来よりも分かりやすくなっている。内容も基本的に共感できる。日本やアジアの視点からの情報発信を重視していることは、ほかの国際放送との差別化を図る上でもポイントだと思う。また、在外邦人や日本人旅行者の安全・安心だけでなく、在留外国人や訪日外国人のライフラインとしての役割にも重点を置いた方針である点もよい。その意味で、ＡＩによる自動翻訳や多言語コンテンツの拡充方針も好ましいと思った。さらに、インターネットサービス、ネット配信の強化を掲げている点も評価できる。今後、テレビやラジオを利用しない層が増えることも予想されるので、インターネットやＳＮＳでの配信がより求められてくるのではないか。福井でのＰＲや宇都宮でのプロモーション例が紹介されたが、頼りになる情報源として外国人コミュニティに番組の存在や有用性を気づいてもらえるよう、今後も引き続き広報を工夫してほしい。編集の基本方針のサブタイトルに「新しいＮＨＫらしさの追求」とあるが、この「新しい」の中身が少し分かりにくいので補足説明が欲しい。また、インターネットサービスの項目に、去年あったＳＮＳの文字が消えているが、この点についても追加の説明があればお願いしたい。

○　基本的には賛同できる。こちらの内容でぜひ進めてほしい。ただ、「新しいＮＨＫらしさ」が何を示すのかを知りたい。既に基本計画に書かれていることをベースに取り組みが進んでおり、あえて「新しさ」ということばを使った理由とそれに呼応する内容が明確ではなかった。また、方針を確立する前段階の議論で、どのようなデータをベースにしたのか。視聴者の反応や視聴したユーザー数など、具体的内容も併せて示してもらえれば、方針に至った背景がより分かりやすい。コンテンツに関する方針に加え、どの経路からのアクセスが増え、強化が必要なのか、などの判断軸を示してほしい。

○　教育系のコンテンツを強化するという方針については、ぜひ実施してほしい。ＮＨＫの災害関連の報道やドキュメンタリーの質は突出していると思うので、力を入れて世界に発信してほしい。日本は、気象災害、火山や地震など、自然災害が多いが、命を守るための情報共有や市民への教育が進んでおり、比較において、死傷者の数が抑えられていることは、誇るべきことで、発信に資する分野だと思う。

○　共感できる基本計画だ。新しさという意味では、方向性としては多角化と効率化なのではと思っている。メディアの多角化、つまりラジオやテレビに加え、インターネットにも力を入れる方針や、多言語化していくこと、また、アウトリーチを在留外国人、さらに子どもにまで広げようとしている姿勢が評価できる。従来の方針を強く打ち出した、という点が新しさではないか。効率化に関連して、受信料が下がる中、国際放送にも影響があるのか聞きたい。今後、より効率的に内容やサービスを拡充することが欠かせないが、そのためには外部の動画共有サイトを使うなど、方法はさまざま考えられる。また、国内放送と国際放送の連携も効率化施策の一つで、同時にクオリティーを上げることが求められるだろう。新しさと効率性を追求する中でも、在外邦人向けの日本語放送をＮＨＫワールド・プレミアムとＮＨＫワールド・ラジオ日本で残す方針と理解したが、この伝統的なサービスについて、今後どのように考えていくのかについても伺いたい。

○　教育系のコンテンツは非常に重要だという点に賛同する。番組審議会でも、教育的価値のある優れた番組を多く視聴してきた。これらの番組が多言語で届けられ、学校現場でも利用されれば、不登校の問題や在留外国人の子どもたちの学習環境を改善する効果が高いと思う。ぜひ実施してほしい。

（ＮＨＫ側）　「新しいＮＨＫらしさの追求」は、2021 年から 2023 年度のＮＨＫ経営計画のタイトルで、基本方針は、この経営計画と一貫した方針であることを示す意味でサブタイトルにした。今、メディア環境、視聴形態、社会やＮＨＫを取り巻く経営環境が変わる中で、求められているのは公共放送の原点に戻ることだと考えている。ＮＨＫでしかできないこと、やるべきことに立ち戻る時期にあるのではないかという意味で、「ＮＨＫらしさ」ということばを使っている。やってきたことをそのまま踏襲するということではなく、さまざまな社会、メディア環境の変化を加味して新しいチャレンジを続けていくことを伝えるため、「新しい」という表現になっている。これを国際放送に当てはめると、日本の放送局が世界に向けて発信する意味をもう一度考え、明確にして実施、実行していく、つまり日本・アジアの視点を明確に打ち出す、ということだ。世界のメディア環境において、欧米メディア対中露のようなポジショントークが多くなっている中で、第三の視点、第三の立ち位置でフラットに伝えていくことの重要性を改めて感じている。また、民主主義の発展に寄与する使命を持つ公共放送として、多様な視点、多様な人々の姿や考え方を伝えるための追求も必要だ。それが信頼性にもつながり、目指すべきブランドイメージではないかという意

味を込め、「新しいＮＨＫらしさの追求」をサブタイトルにしている。ＳＮＳについては、インターネットについての言及で「外部プラットフォーム」とある中にＳＮＳを含めている。この基本計画を作るに至ったベースとなる議論やデータについては、世界の重点地域で実施している視聴者のサンプル調査、インターネット上で計測するアクセスデータ、視聴者からのモニター報告のほか、さまざまな調査結果を参照している。国際放送局では継続的に、教育現場や文科省への聞き取り調査も実施しているが、海外ルーツの子どもたちが日本語の授業や教材についていけず、不登校になってしまうケースがあり、ＮＨＫの教育番組を多言語で見られるととても助かるという話を聞いたことが、今回の教育ゾーン開発のきっかけの１つだ。「在外邦人向けの発信」については、今後、ふさわしいサービスのあり方を検討していくべきだと考えている。公共放送として、海外にいる日本人の安全・安心のベースとなる、日本語で得られる情報インフラを提供するという使命を、インターネットなども使いながら、効率的に果たしていくことを検討していきたいと考えている。

＜「Ethical Every Day　Episode3: Enjoying Meals with Less Waste」
（９月１４日（水）９：３０ ほか）
「Rene Goes to School」　（９月２８日（水）９：３０ ほか）について＞

○　「Ethical Every Day　Episode3: Enjoying Meals with Less Waste」は、エシカルな考え方と実践例を紹介した、良質な番組だ。京都と埼玉での取り組みにそれぞれ個性があり、多様な実践例を示した点が評価できる。また、企業や農家、大学の連携が進んでいることで、将来的な広がりに期待できると感じた。既にＢＳ１で日本語版が放送されたということで、国内の視聴者の啓発となる点でもよかった。

一方、エシカルがＺ世代やミレニアル世代などの若者のトレンドの１つになっている背景について、日本の学校での　ＳＤＧｓや、エシカルに関する教育の状況、海外の事例との比較などがあると、より客観的に理解ができると思った。また、国連のＳＤＧｓキャンペーンの目標１２の「つくる責任、つかう責任」に焦点を当てた番組だと思うが、番組の末尾などで、ＳＤＧｓキャンペーンとの関連が示されるとよかった。ホストのエバンズ亜莉沙さんとマシュー・チョジックさんのやりとりが穏やかで、親近感を持たせる語り口で、データの示し方や音楽も効果的でよかったと感じた。

「Rene Goes to School」は、「自分は一体何者なのか」という普遍的な重い問いを扱った番組だ。ダイバーシティ、インクルージョンの問題を考える導入としても優れている。カメルーン生まれの漫画家、星野ルネさんには圧倒的な人間的魅力があり、アイデンティティークライシスのテーマにふさわしい案内役だと感じた。また、主人公のネパールルーツの少女、ウパマ・アディカリさんや、星野さんの家族を丁寧に描いており、家族の物語として見ることもできるところがよかった。そして、自分

の居場所を見つける手助けとして、星野さんのような第三者の存在が重要であることを伝えたことの意味も大きい。アニャ・フロリスさんのナレーションもとても聞きやすくよかった。

○　２つの番組ともに質が高く、メッセージ性の高い内容で楽しめた。中学生や高校生にも見て欲しい番組だが、子どもたちに動画共有サイト以外の媒体でリーチするのは難しい現状がある。番組を届ける方法を、ぜひ考えてもらいたい。

「Rene Goes to School」は、難民として、または親の事情で来日し、困難な状況におかれた子どもたちを、勇気づけ、明るい気持ちにさせる効果がある番組だと思う。さらに自分たちが住むコミュニティでこれらの家族を支援している人たちにも広く届き、放送に加えてウェブサイトなどでも情報が得られるようになればよい。支援の窓口となる自治体と連携し、番組を見た人に、支援の窓口の情報も伝えられれば、さらによいと思う。

○　「Ethical Every Day　Episode3: Enjoying Meals with Less Waste」は、大学生など、若い世代で増えている、環境に配慮した生活に関心が高い層に見てもらえれば、刺激や活動のきっかけとなる可能性があると思う。番組のトークの部分で、ホストの視線が、カメラやリモートで参加していた出演者の画面にせわしなく移り、見づらい部分があった。視聴者は、ハイブリッド形式にも慣れてきているので、もう少し落ち着いた画面になるよう工夫されるとよいと思った。

「Rene Goes to School」について、星野さんの明るさに加え、漫画の力をあらためて素晴らしいと感じた。星野さんの漫画は、技能が高く、表情や雰囲気をよく捉えている。星野さんの存在が番組の成功の大きな鍵となっていると思う。

○　「Ethical Every Day　Episode3: Enjoying Meals with Less Waste」では、ゼロ･ウェイストに向けたさまざまな事例を見ることができ有意義だったが、取り組みに新しさはなかったのが残念だ。海外の最新事例なども盛り込んだ方がよかったのではないか。また、物の量り売り、プラスチック容器の排除や規格外の物の販売などが、なかなか浸透しないのはなぜか、という点を掘り下げてもよかった。恐らく日本の消費者の「食の安全信仰」や価格の高さなど、さまざまな障壁が見えてくると思う。その上でゼロ･ウェイストを進めていく施策について考えることができればよかった。前半のホスト２人のキッチンでのシーンだが、若干安っぽく感じた。この辺りの改良は必要ではないか。

「Rene Goes to School」は、温かい気持ちになれるよい番組だ。アイデンティティーに悩む在留外国人の子どもたちも前向きな気持ちになれるのではないか。漫画という、身近なツールを使って体験を共有し合うという試みは、アイデンティティー形成において有効だと改めて実感し、「アイデンティティーを決めるのは自分自身。そのための旅路を少しでも楽なものにできたら」という星野さんのことばに共感し、自分たちにもできることはないか、と考えさせられた。

○　２つとも、届ける対象は、国内の当事者、同じ関心や体験を持つ人たちなのか、海外の日本の事情を知らない人たちなのか、という点がよくわからなかった。事情を知

らない海外視聴者向けには、例えば、日本の学校という独特な部分もある背景についてなど、もう少し説明が必要ではないか。両番組とも、聞きやすく、英語を学ぼうとする人にはよいコンテンツだと思った。大学の授業など、英語教育の場でのコンテンツとして活用することも検討できるのではないか。

○　「Ethical Every Day　Episode3: Enjoying Meals with Less Waste」は、タイトルをもう少し工夫できるのではないか。特に「Enjoying Meals with Less Waste」は真面目な英語だが、動画共有サイトではインパクトが弱いと感じる。「Food Loss, Zero Waste Kyoto」など、興味を引くキャッチーなタイトルが必要ではないか。また、量り売りと最新の機器を使って測定するというシステムは、京都でこのようなことをやっているのかと勉強になったが、既にニューヨークのスーパーなどでは当たり前のシステムで、むしろ日本が遅れている。遅れている日本、という認識の上で、それでも現状が変わりつつあると伝える意味はあると思うが、なぜ新しくない例が取り上げられているかと疑問に思う海外視聴者もいるかもしれない。また、ホストの二人は感じがよいが、二人の会話が友達どうしのようなくだけたトークになりすぎた部分もあり、視聴者への語りかけを意識したバランスを保つよう工夫してほしい。

「Rene Goes to School」について、政府が共生社会実現ロードマップで具体的な施策を示していることもあり、現状や、必要な情報が得られるきっかけとしてよい番組だと思う。在留外国人を仲間として描き、かつ悩みを掘り下げて、アイデンティティークライシスの悩みを当事者が自らのことばで語ったことにより、心に響く番組となった。

○　フードロス、フード・ウェイストは、いずれも非常に重要なテーマであるが、番組で言及されていた、プラスチックの容器包装が過剰であるという現状も大変深刻であり、日本はこの分野でかなり遅れていると思う。カメルーンでは、プラスチック容器包装を禁止する法律もあるほどで、途上国でも多くの国がプラスチックごみの削減に向けて取り組みを行っている。国際放送で取り上げる際、「遅れている日本」も努力していることを伝える視点であるのか、あるいは「このテーマを世界的に取り組もう」という呼びかけであるのか、明確でなかった。後者の場合、海外の先進事例を取り上げた方がよかったのではないか。また、フードロスとプラスチック容器包装の問題はそれぞれ重要なテーマなので、個別にそれぞれ深めてもよかったのではないか。地上波でも放送されるということだが、さらに学校現場も含めて国内でも展開してもらいたい。また、大学で食育について取り組んでいる事例について、インタビューだけで映像で見られなかったのは少し残念だった。

「Rene Goes to School」について、外国にルーツを持つ子どもが、どのように異文化の中で自分のアイデンティティーを確立し、異文化を受容し、異文化の社会において自身が受け入れられていくかは、普遍性のあるテーマだ。日本は均質的な社会で、学校現場でいじめの問題もあり異なる存在が排除されがちだ、ということを考えると、このテーマはより多く日本で取り上げるべきだと思う。星野さん自身がアイデンティティーの揺らぎや葛藤を経験し、漫画でそれを表現するだけでなく、ウパマさんのような人たちを手助けする手段として漫画を用いて支援を実践している点が素晴

らしい。多文化共生社会を実現するために、こうしたテーマは引き続き取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）　「Ethical Every Day　Episode3：Enjoying Meals with Less Waste」について、若い世代でエシカルな取り組みが広がっている背景は、出演者の選択や、トークの中に入れ込むようにしたが、もう少し印象が強く残るようにしてもよかった。今後工夫したいと思う。海外の事例との比較については、意識をして取り組みたいと考えている。シリーズのほかの回ではインドネシア、バリ島を取材した。また、ＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮのＳＤＧｓキャンペーンのホームページから、この番組のビデオ・オン・デマンドのページに案内できるようになっているが、番組からＳＤＧｓキャンペーンへと誘導する流れはなかったので、意見を参考にしたい。また、シリーズの第１回で、国連の持続可能な開発目標について触れたが、その後のエピソードでも、関連が伝わるように検討したい。番組は、動画共有サイトのＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮ公式チャンネルで公開しており、反応がよく、手応えを感じているところなので、今後、ほかのエピソードも順次公開していく。司会者の視線が落ち着きのないように見える部分については、次回以降、撮影時に工夫していきたい。また、会話をカジュアルにする努力をした結果、友だちどうしの会話のように感じられた部分もあったのかと思う。今後は、話し方についても、きちんとしているが親しみやすい、というトークを目指したい。若者にリーチするための、インパクトあるタイトルを目指す点も今後試みたい。伝えようとしているのは、必ずしも日本が遅れていることではなく、世界的な取り組みの必要性だが、先進事例のみの紹介ではほかのチャンネルとの差別化ができない。アジア的な発想、たとえば日本の「もったいない」というコンセプトを意識しながら、ＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮならではの発信をしていきたい。

（ＮＨＫ側）　「Rene Goes to School」は、2020 年１０月に「Where We Call Home」で星野ルネさんが主人公となるエピソードを制作したことがきっかけとなった。コロナ感染拡大により、実現に２年間かかったが、星野さんの漫画の魅力と体験を生かしたいという願いが、今回の番組につながった。教育現場での利用については、静岡の高校の先生から手紙をいただいた。授業の中で視聴し、生徒が星野さんへ手紙を書いたというものだ。手紙の中には外国ルーツの生徒から、共感したというものもあった。このように授業に活用された例もあり、動画共有サイトでの公開などを通じて多くの人に見てもらえるのではないかと手ごたえを感じている。また、海外視聴者に向けて、日本の事情や背景を丁寧に説明していくことも心がけたい。インドネシアなどアジア地域の視聴者から寄せられた反響の中に、番組に共感した、日本に対する見方も少しずつ変わってきているという感想があった。また、在留外国人は第２、第３世代が増えている。引き続きこのテーマに関心を持って取り組みたい。

２０２２年 １０月 国際放送番組審議会

２０２２年１０月のNHK国際放送番組審議会（第６９５回）は１８日（火）NHK放送センター（ウェブ会議）で７人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、NEWSLINE IN DEPTH「Japan－North Korea Summit 20 Years On: Diplomat's Secret Mission」、NHK Drama Showcase「TEEN REGIME」Episode 1 Birth of a Regimeについて説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	岡田　亜弥	（名古屋大学大学院国際開発研究科 教授）
副委員長	田中浩一郎	（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授 （一財）日本エネルギー経済研究所 参与）
委　　員	阪田　恭代	（神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 教授）
委　　員	佐藤たまき	（古生物学者、神奈川大学理学部生物科学科 教授）
委　　員	永井　　均	（歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授）
委　　員	中村　勇吾	（インターフェースデザイナー、tha ltd. 代表）
委　　員	仲本　千津	（社会起業家、㈱ＲＩＣＣＩ EVERYDAY 代表取締役ＣＯＯ）

（主な発言）

＜最近の国際放送の動きについて＞

○　国際企画部から、アメリカ公共放送局ＰＢＳ向けに国際放送番組を配信する枠組みで、「Myanmar Coup Digital Resistance」「Myanmar in Turmoil」の２本が全米218のＰＢＳ局で放送されたと報告があった。これらの２本は、ＮＨＫスペシャルで放送された番組を英語化したもので、このように、国内放送と連携して効果的な発信を行っていることを高く評価したい。アメリカでのカバー率８割ということだが、何を母数とした８割なのか。

（NHK側）　アメリカ全体の視聴可能世帯、テレビを持っている世帯を 100 として、放送が届いた世帯の割合を計算している。放送したＰＢＳ局が、それぞれ持っている視聴可能世帯の数を足し上げたものが、アメリカ全土の視聴可能世帯の何割にあたるかという数字だ。ＰＢＳでは、このカバー率を一つの指標として示している。

○　世帯数を母数として８割、は高い数字で、すばらしいと思う。

＜「Japan－North Korea Summit 20 Years On: Diplomat's Secret Mission」
（9月5日（月）9:10 ほか）
NHK Drama Showcase「TEEN REGIME」Episode 1 Birth of a Regime
（8月21日（日）9:10 ほか）について＞

○　日朝首脳会談を取り上げたインタビュー企画「Japan－North Korea Summit 20 Years On: Diplomat's Secret Mission」について、短い企画だが、会談の開催までの舞台裏を担当外交官本人の視点とことばで描いた、大変貴重なオーラルヒストリーになっている。今年は会談から２０年という節目の年で、時宜を得た企画だ。元外務審議官の田中均氏が、官僚や政治の役割について、かなり率直に語っている点が印象深かった。また、事前交渉が行き詰まった際、当時の小泉純一郎首相自身の決断が事態打開を強く促したという事実も明かされ、興味深かった。ただし、拉致問題が現在も未解決であることを考えると、外交の裏側を表面化させることで、今後の交渉にマイナスの作用がないかという点が気になった。

「TEEN REGIME」は、ＡＩとＳＦと青春ドラマを融合させ、魅力的なエンターテインメントになっている。初めは、実験都市であるウーアの世界に、恐る恐る入って行ったが、進行とともに単なる空想ものではない、リアルさを感じるようになって引き込まれた。現実にも、ＡＩを積極的に取り込んだ近未来の都市構想、いわゆるスマート・シティー計画が進んでいる地域もあるので、「TEEN REGIME」の物語を、あながち空想とも言い切れない、妙なリアルさを感じた。俳優陣が魅力的で、非現実と現実が絡み合うバランスも良く、音楽や音、衣装やコンピューターグラフィックスの色彩などにも、工夫が生きている。現代日本社会や政治の課題、若者の見方の一端も描かれ、ＡＩ技術の都市建設への活用方法の例示が示されるなど、視聴者を引き付ける工夫がある点も評価できる。ＮＨＫ側の制作・発信の意図が、どの程度、世界の視聴者に受けとめられたのか、聞きたい。

○　「Japan－North Korea Summit 20 Years On: Diplomat's Secret Mission」について、普段あまり目にすることがない外交官の仕事や、その仕事の元となる論理について、本人の口から語られていることは、貴重で印象的だった。特に最後の方で、外交官の仕事はどうあるべきか、民意とどう距離を置くのかなど仕事の基本や美学といえる内容を語ったところは興味深く、より深く聞きたかった。外交官や官僚の仕事の詳細はあまり表に出ず、語られていないと思うが、こうした考え方や美学のようなものが、広く伝わる機会があればよいと思う。最近、キャリアとして、官僚の人気が落ちていると聞くが、仕事のおもしろさややりがいが伝わる番組が増えるとよいのではないかと思った。

「TEEN REGIME」は、脚本や設定がユニークで新鮮だった。アニメーション映画のような設定を、ドラマとして成立させたというのが意外で引き込まれた。ＮＨＫのドラマではあまり使われない音楽の演出がよく魅力的だった。一方で、ＡＩをはじめとするニューテクノロジーの仕組みの解説が、情報番組やニュースのようなスタイルで、その部分で冷めてしまい、作品として安っぽくなってしまうのではないかと感じた。もう少し作中の時代やその場所におけるリアリティーが感じられると、よりド

ラマとして入り込めたのではないか。映像のクオリティーも大変高いと思うが、ＳＦ映画を見慣れている人にとっては、特殊効果を強調したシーンなどのレベルは高いとは感じられない。ドラマとしてはすばらしいのに、映画のクオリティーにはなかなか届かないもどかしさがある。視聴者はドラマや映画の予算の話は分からないと思うので、やはり映画と差別化し、ドラマならではのＳＦの表現の在り方を研究すべきではないかと思った。また、脚本が大変おもしろく、特に星野源さんの演じる役柄が効いていると思った。若者と高齢者のギャップを意識したドラマの中で、そのどちらでもない星野源さんの役が、最終的にどのような役割を果たすのか気になった。

○　「Japan－North Korea Summit 20 Years On: Diplomat's Secret Mission」は、「クローズアップ現代」でも放送されたので、国内放送と国際放送の連携という意味でよい事例となった。また、平壌宣言２０周年のタイミングで「日朝交渉」を取り上げたことは有意義である。日朝の問題では、拉致・核・ミサイルの３点セットで語られることが多いが、今回は、外交官と外交の役割に焦点を当てたことに特徴があった。その外交手法については賛否両論のある田中均氏の実際の行動や考え方を記録でき、大変貴重なインタビューだった。１３分の番組で、時間が足りなかったかもしれないが、インタビュー後のコメンタリーはもう少し踏み込んだ内容でもよかった。拉致被害者５人とその家族が帰ってきたことは大きな成果だったが、海外の視聴者に分かるように、もう少し多角的に議論を紹介した方がよかったのではないか。また、多くの視聴者に届けるためには、動画共有サイトのチャンネルで暫定的に掲載するなどの方法があると思うが、その計画はあるのか。ウェブサイトを閲覧しに来るユーザーは限られているので、動画共有サイトで関連付けた方が効果的だ。

「TEEN REGIME」は、テーマとしてＡＩの問題や少子高齢化、世代交代など、先進国の共通の課題を取り上げた点がよかった。また、政治とガバナンスなど、硬派な内容を考えさせたこともＮＨＫらしい番組だった。ただし、英語のタイトルが地味で、ことばのインパクトが弱かった。「１７才の帝国」が国内放送時のオリジナルタイトルだが、「TEEN REGIME」の regime は学者が使うことばで、難しい印象だ。さまざまな配信サービスでグローバルなスケールのヒット作品に触れる機会の多い世界の視聴者にとっては、インパクトが足りないのではないか。例えば「TEEN's EMPIRE」、「SOLON's EMPIRE」など、もう少し分かりやすいタイトルにしたほうがよかったのではないか。また、ＡＩが選んだ高校生が都市を統治する実験、Project Utopi－AIが日本語では「ウーア」と呼ばれていたが、英語字幕と一致していなくもったいなかった。英語でも「ウーア」という呼び名にして、ことばを広める方法もあった。さらに、「温かく見守ってください」という日本語的な表現を、字幕では「with open mind」と翻訳していたが、日本語では「あまり批判しないでください」というネガティブな意味だ。「open mind」は、英語ではポジティブな意味なので、日本語のニュアンスが伝わらない。また韓国語版もあれば、ＡＩや若者の話題に関心の大きい韓国の視聴者からも共感が得られるのではないか。この番組についても、動画共有サイトで公開するか知りたい。

○　「Japan－North Korea Summit 20 Years On: Diplomat's Secret Mission」は、外交の専門家が語る、知られざる舞台裏が明かされ、初めて聞く内容に驚いた。

政治や外交の専門家が一般市民の意見に左右されてポピュリズムに傾きがちな点を意識して、むしろ市民の意見とは距離を取って、専門家の立場で考えることの大切さも伝わった。１３分間が短く感じられ、１時間のドキュメンタリーにしてもよい、濃い内容だと思った。おそらく、田中氏本人も、さらに多くのことを伝えたかっただろうし、企画としても伝えたい内容がまだあるのではないかと感じた。

「TEEN REGIME」は、よい意味で気持ち悪さが印象的なドラマだった。つまり、ドラマではあるが、「本当に将来こんなことが起こりそうだ」という予感めいたものに落ち着きのない気持ちになり、リアルな感じが、ドキュメンタリーを見たような印象を生んだ。ドラマの終盤で議会を廃止する際、ＡＩがその場で市民にアンケートを取り、たくさんの人が支持したことで決断する場面があった。多数決やインタビューで結論を出す方法が、ある種ポピュリズムの一面にも見え、「Japan－North Korea Summit 20 Years On: Diplomat's Secret Mission」を視聴した後でもあり、考えさせられた。

○ 「Japan－North Korea Summit 20 Years On: Diplomat's Secret Mission」は、歴史的な場面の裏側を丁寧にひも解く重要な証言が多く、見応えのある内容で、さらに背景を深く知りたくなった。日朝首脳会談の実現に関わった人たちに、その当時の交渉の限界についても、踏み込んで話を聞きたかった。外交という仕事は、世論には迎合せずに長期的な視点で動いていかなければいけないということが、実体験をもとに語られていて勉強になった。ぜひ、拡大版も制作してほしい。また、日朝の現状にも関心が向く内容なので、ぜひ別の形でも放送してほしい。

「TEEN REGIME」は、ドラマとして楽しめる番組だった。扱われているテーマは、世代間格差の問題や、議会の在り方などで、近未来的な要素が加わり、リアルな部分とＳＦが共存しており、引き込まれた。展開が早く、テンポもよかった。

○ 「Japan－North Korea Summit 20 Years On: Diplomat's Secret Mission」について、日朝交渉から２０年を迎えて、その間に忘れられてしまった側面や、当時、語られていなかった舞台裏、困難だった点などに光を当てる優れた企画だと思った。ウクライナをめぐる紛争が長期化の様相を見せている現在も、どう収束するにせよ表に出せない、あるいは出ることのない外交の秘密交渉は必ずあると思う。一般的な情報開示の観点とは別に、やむを得ない手段として秘密交渉の重要性や有用性を考えさせられる内容だった。インタビューは、緊迫感があったが、スタジオでの掛け合いになったところが、やや平板で緊迫感が抜けたように見えたのが、少し残念だった。

「TEEN REGIME」について、国際放送でドラマに挑戦することは大変よいことで、歓迎できる。今回、第１話が視聴対象になっていたが、シリーズ全話を興味深く視聴した。３０年にわたって停滞してきた日本の政治、社会に対してのアンチテーゼを題材としているので、引き込まれる。ただ、一方で、ＡＩによる理想社会の実現や追求、実験は、映画やドラマで既に使い古されている題材でもある。ストーリーは、過去のＳＦ作品などから先が推測できてしまい、予定調和的に展開していき新鮮さがなかった。音声は日本語で、英語字幕が載っていたが、字幕を５０分間読み続けるのは、きついと感じた。例えば、１話分を２５分の２回に分けて、全編５話を１０話に構成し直すことを考えてもよいのではないか。また、今回視聴したものは字幕版だっ

たが、吹き替え版の放送もあった。英語のセリフは自然に仕上がっており、吹き替え版を中心に放送してもよいのではと感じた。また、秘書が、部屋にいる星野源さん演じる官房副長官を呼びに来た時に、名前で呼んでいたが、リアルにするには、副長官、と肩書を呼んで声を掛ける方がよい。

○　「Japan－North Korea Summit 20 Years On: Diplomat's Secret Mission」について、大変時宜を得た貴重な題材を扱っていると思った。当事者である田中均氏が、当時、語ることができなかった、評価がわかれるような内容を、今、２０年後の節目で語ることには意義があった。ただ、家族の帰りを待つ拉致被害者家族の思いを伝え、両国のこう着状況を打開するヒントを得ることが目的だとすれば、そこまでは到達できていなかった。外交官としての自負について、または専門家の立場については語られているが、現在の拉致問題につなげる点では少し弱かったのではないか。終盤で田中均氏が「秘密でやったことのつけがきた」と言っているが、「つけ」とはその後のこう着状況を指していたのか、本人が、「つけ」をどのように捉え、それを視聴者に理解してもらおうと思っているのか、若干不明確であると感じた。

「TEEN REGIME」は、ＡＩを使うことで社会の統治の在り方が変わっていくという、近未来的にありそうな社会をフィクションでおもしろく描いていて引き込まれた。一方で、ＡＩに依存する社会の怖さも感じた。英語字幕について、「administration」は、「governance」と言ったほうがよいのではないか、また豪雨は「rain fall」でなく、別の表現を使うべきではないかなど、気になる箇所があった。

（ＮＨＫ側）　２０年前の日朝首脳会談の際、外務省を担当していた現場の記者として、背景や意義について掘り下げた取材や報道ができたか、秘密交渉をそのままにしておいてよいのか、問題意識を持っていた。田中氏しか知り得ない細部を聞く機会を作りたい、と今回の企画に取り組んだ。「現在の北朝鮮との交渉に影響を与えることはないのか」という質問について、インタビューを依頼してから半年以上熟慮を重ねた田中氏が、一番考えたのが、この点だったと思う。「もはや影響を与えない部分は、明かせる」と判断して、このインタビューに臨んだと理解している。また、今回すべてを話したわけではなく、今の交渉に影響を与えかねない部分は、伏せられたままだということだ。制作者としても、北朝鮮側の当時の交渉当事者、ミスターＸと呼ばれる人物が、既に処刑されたと考えられること、金正日から金正恩へ体制が代わっているということを考慮すると、放送の内容が、現在の日朝間の交渉に影響を与えることは考えにくいという判断もあった。今の拉致問題に対するヒントまでは示せなかった、という意見について、この番組が目指したのは、直接事態を動かすヒントを得る、というより、２０年で忘れ去られた問題について、もう一度関心をもってもらうことだ。北朝鮮問題への関心が高まれば、状況を動かす力になるかもしれないと期待した面もある。番組自体が短かったので、拉致被害者家族の思いは伝え切れなかった。国内放送の「クローズアップ現代」ではその部分も取り上

げている。また、５０分の国際放送の大型番組を目指して、現在、制作を進めており、今回使い切れなかった田中氏のインタビューや、補足する情報も加えるつもりだ。特に当時のブッシュ政権と日本との関わりについてなど、外交の駆け引きについても、より踏み込んだ内容にすることで、関心に応えたいと思う。

（NHK側）　動画配信サイトへの掲載については、最近、さまざまなニュース企画を掲載することを本格化している。この番組についてはまだ掲載していないが、今後、ふさわしい企画や番組を、より効果的な方法で掲載していきたいと思っている。

（NHK側）　総合テレビの連続ドラマを英語化し、世界に向けて発信するNHK Drama Showcaseに本格的に取り組むにあたり、世界の視聴者にどのようなドラマを届けるべきか検討した。リサーチの一環として、世界のドラマ・プロデューサーに、複数の企画案を示し、フィードバックをもらったところ、ＡＩを題材にした企画は、日本らしくてよい、という反応を得た。また、日本のコンテンツとして高評価を得ている、アニメを意識して、その良さを取り入れることも考えた。設定としては、どの文化圏でも普遍的な関心のある、政治を取り入れることにした。制作上、一番難しかったのは「何年後の世界にするか」というところだが、遠い未来にすると、巨大な予算で制作しているＳＦ映画との差が目につき、また、むしろフィクションの世界では既視感もあり、損なのではないかと考え、より近い未来の設定を考えた。ＳＦではあるが、リアリティーのある世界を目指したつもりだ。エンターテインメントを通して、日本の若い世代に、少子高齢化など社会の課題や、政治的なテーマに関心を持ってほしいという気持ちもあったので、「こうなるかもしれない」と思えるリアルな設定を考えた。技術の説明部分などで画面の作りに安っぽい印象を与えるところがあるとすれば、今後さらに工夫していきたい。日本の現状を理解していないかもしれない海外視聴者にどのように見られるのか不安もあったが、設定に対する評価は高く、自分の国でも同じ課題がある、とポジティブに受け止められたようだ。また、ストーリーのテンポや音楽の使い方などについてもよい評価をもらった。挑戦の第一歩である、このシリーズで、手ごたえを感じることができた。さまざまな意見を今後に生かしていきたい。

（NHK側）　国際放送局では、開発スタート時から、ドラマ制作者とともに、今回のチャレンジに取り組んできた。タイトルについても時間をかけて検討し、以前に視聴番組にもなった「How to be Likable in a Crisis」のような長いタイトルではなく、さまざまな世界のヒット作品にならい、短くインパクトのあるタイトルにしたいと考えた。日本語版では「１７才の帝国」としたが、１７才、という年齢のイメージが文化背景により異なり、使用を避けるべきだという意見のほか、若い人たちの意見も検討した結果「TEEN REGIME」と決まった経緯だ。韻を踏んでいて読みやすく、耳

に残りやすいという意見もあった。regimeということばそのものは堅さがあり、地味だが、耳に残りやすい音を重視したタイトルで挑戦した。

若い世代からは、思っていた以上に高い評価があり、特にドラマの序盤、１本目から２本目で引き込まれたという意見が多かった。近未来を描くストーリーの設定やテーマがよかったことと、音楽が受け入れられたこと、魅力的な、日本で人気が高まっている若手の俳優を起用できたことなどが、共感を得られたのではないかと考えている。香港やインドネシアなど、アジアの視聴者からもよいコメントが寄せられ、国際放送にとって、新しい視聴者との出会いにもつながった。字幕版と吹き替え版については、字幕版の方が視聴は多いが、吹き替え版もクオリティーが高く、演じている俳優にマッチした声になっていてよい、という意見があった。英語を母国語としない視聴者からは、吹き替えの方が見やすいという意見もあった。

５０分全５話のシリーズに対して、５話は少ない、１０話が適当だという意見もあった。１話を２つに分けて２５分とすれば１０話になることもあり、再編することも一つの方法だと思う。通常は、国内の視聴傾向に合わせて本数を決めており、そのまま英語化してきたが、より世界の視聴者目線で、見やすく工夫していく余地はあると思う。動画配信サイトについては、より多くの視聴者にドラマの存在を知っていただく効果が高いと考えているので、可能な方法を模索したい。多言語展開について、現在、フランス語とインドネシア語の字幕制作を進めている。韓国語など、他の言語についても、需要に応じて、取り組んでいきたい。

２０２２年 ９月 国際放送番組審議会

２０２２年９月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第６９４回）は２０日（火）ＮＨＫ放送センター（ウェブ会議）で９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近のＮＨＫの動きについて、続いて「２０２２年度後半期の国際放送番組の編成」について、および、最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「国内在留外国人に向けたサービス」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	岡田　亜弥	（名古屋大学大学院国際開発研究科 教授）
副委員長	田中浩一郎	（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授 （一財）日本エネルギー経済研究所 参与）
委　　員	阪田　恭代	（神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 教授）
委　　員	佐藤たまき	（古生物学者、神奈川大学理学部生物科学科 教授）
委　　員	杉山　晋輔	（早稲田大学 特命教授、前駐米大使）
委　　員	永井　　均	（歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授）
委　　員	仲本　千津	（社会起業家、㈱ＲＩＣＣＩ ＥＶＥＲＹＤＡＹ 代表取締役ＣＯＯ）
委　　員	新浪　剛史	（サントリーホールディングス㈱ 代表取締役社長）
委　　員	村上由美子	（ＭＰｏｗｅｒ　Ｐａｒｔｎｅｒｓ ゼネラル・パートナー）

（主な発言）

＜国内在留外国人に向けたサービスについて＞

○　国内在留外国人に向けたサービスについて、また、最近の国際放送の動きについて、報告を大変興味深く聞いた。細かい点ではあるが、説明上気になった点を指摘したい。説明や、資料上の言語の表現で、“朝鮮語”と“ハングル”が混在していた。政府の資料などでは、“朝鮮語”と表現しているが、韓国では朝鮮語とは言わず、“韓国語”と呼ぶため、悩ましい問題ではある。ＮＨＫの語学番組の名前は、“朝鮮語”“韓国語”ではなく、“ハングル講座”となっている。一つの呼称に集約する解決策はないものの、言語の説明をする際には以上の背景を理解した上で使うべきだと思う。

○　在留外国人に向けた多言語サービスについての紹介にあったように、これまでＮＨＫワールド ＪＡＰＡＮがテレビやラジオ、あるいはインターネットで多言語放送やＡＩ字幕を活用しながら、防災情報や生活情報など、安全・安心な暮らしのための情報を提供してきたことをまず評価したい。在留外国人に配慮した情報発信は、日本への信頼を高める一助になり、日本のソフトパワーとしても重要だと思う。ただ、在

留外国人のニーズの把握についてはまだ課題があるのではないか。該当する視聴者と、直接、対話を進めようとしているプロジェクト「Chatroom Japan」で試みているように、在留外国人に寄り添った情報提供サービスを行うには、ニーズを把握する必要がある。ＮＨＫワールド ＪＡＰＡＮがこれまで行ってきた調査でどのようなニーズが把握され、どのように実践に生かしているのか、また、課題が見えている部分があれば、その内容を紹介して欲しい。さらに、これまで取り組んできた、認知を広げるためのイベントや外部機関などへの働きかけで、支援が必要な人たちに情報が届いているか、どんな課題に向けて取り組んでいるのかについても知りたい。国際放送が良質なサービスを提供してきていることは分かっているが、活用してもらうための十分な周知が行われているか検証も必要だ。これらの課題に向けた一つの施策として、国際放送の内容を元に、日本での暮らしを始める際の情報やヒントを集めた冊子「Japan Life Guide」を６言語で作成、配布していることは大変よい取り組みだ。

○　在留外国人に向けたサービスについて、公共メディアとしての役割を考えるというのは、時宜を得たテーマで、５月に多言語メディア部と大学が共催したセミナーも有効だった。６月１４日に政府が外国人との共生社会に向けてのロードマップを閣議決定しており、詳細な４年間のプランが発表されたこともありタイムリーだ。ただ、このロードマップについてはメディアでの紹介がほとんどなく、国民にも伝わっていないのではないかという点が残念だ。公共メディアとして、ＮＨＫも、共生社会に向け、後押しをする意味で、関係の機関などと連携し取り組みを進めるべきである。生活支援情報の発信や日本語教育などの分野でも、行政も施策を進めている。情報交換や連携を進め、課題があれば協議していくことも重要だ。例えば、指摘のあった、韓国語の表示についても、ＮＨＫワールド ＪＡＰＡＮの多言語情報サイトは「코리언 : ハングル」になっており、法務省の出入国在留管理庁の外国人生活支援ポータルサイトでは「한국어（韓国語）」と表示している。こういった個々の点に加え、より包括的な施策についても情報交換はないのか知りたい。

○　参考番組として紹介された、「Chatroom Japan: Media Role for Foreigner-Friendly Japan」はよい番組だ。外国人からの発言を受けて、解決する方法についても話し合われているが、その結果もフォローがあればさらによいと思った。この番組での発言は、日本のコミュニティーに対するメッセージでもある。在留外国人に向けた発信を強化するとともに、日本社会のあり方を考えていかなければならないと感じた。そのためには、たとえば「Chatroom Japan」を国内放送でも取り上げられればよいと思う。メッセージを受けとめて社会で生かしていく枠組みを考えなければ、プロジェクトの成果が生きないと思う。在留外国人向けの災害情報の提供は重要で、地震や津波の危険情報だけではなく、医療機関や行政との連携も課題だ。地域の医療機関や行政の窓口では、英語や多言語に対応しきれないところもまだあり、住民に外国の方がいることを十分意識できていないサービスもあると思う。これらの意識も変えていく必要があると思う。国際放送のサービスは、日本で暮らす外国人にとって重要なソフトインフラであるという意識をもって取り組んで欲しい。

○　共生社会を目指すにあたり、在留外国人の方々がどのような問題を抱えているか、

日本社会にどのような印象を持っているか、日本人も知るべきだと考えている。番組も、在留外国人向けと日本人向けと分けるのではなく、共有してお互いに理解を深める場があるとよいと思う。外国人が多数出演して、おもしろおかしく、日本人にとって「珍しい」と感じるような文化や習慣をクローズアップするバラエティー番組もあるが、それだけだと本当の意味でお互いの理解は進まないのではないか。ぜひ「Chatroom Japan」では異なる手法で取り組んでほしい。

「Japan Life Guide」は、インターネットでダウンロードするだけでなく、自治体と協力して、冊子を配布する仕組みが大変すばらしいと思った。また最近、自治体は、ＳＮＳのアカウントでタイムリーな情報発信を進めており、ユーザーの一人としても便利に使っている。これらの発信も多言語で提供されることが望ましく、今後ＮＨＫと連携して充実させていくことにつながればよりよいと思う。

○　日本で暮らす、また来日中の外国人に、どのような生活情報を提供するのかというテーマで、これまでも意見交換をしてきた。今日は、今までと少し違う観点でコメントしたい。ビジネスに従事し、日本のマーケット、経済状況や政策に関心の大きな外国人も多い。「NEWSLINE」、「NEWSROOM TOKYO」など、こうした関心に応える番組も放送しているので、ＮＨＫワールド ＪＡＰＡＮを見てほしいが、残念なことにあまり知られていない印象だ。インターネットを活用したサービスを含めてＮＨＫワールド ＪＡＰＡＮの存在感を高めるよう取り組むべきだ。一方、総合テレビの「ニュース７」や「ニュースウオッチ９」は外国人の知人との間でもよく話題になる。放送やＮＨＫプラスの同時配信では英語副音声を聞くことができ、よいサービスになっているためだと思う。ただ、見逃し番組配信には副音声がない。ＮＨＫワールド ＪＡＰＡＮでは、海外向けにＮＨＫワールド・プレミアムで「ニュース７」や「ニュースウオッチ９」が英語副音声つきで放送されている。技術的な制約があるのかもしれないが、ＮＨＫプラスの見逃し番組配信でも英語で聞けるようにしたり、英語音声版の「ニュース７」や「ニュースウオッチ９」を再放送のような位置づけでインターネット上で配信するなどの措置はできないだろうか。これまで国際放送は、国内放送のさまざまな番組と協力してきたが、国内ニュースについても連携することはできないか。

○　ロシアによる軍事侵攻後、多言語のサービスにウクライナ語がタイムリーに加わったことはすばらしいと思う。ウクライナ避難民を日本で受け入れることは、国にとっても大きなステップで、ＮＨＫがウクライナ語をサービスに加えたことは歓迎すべきことなのだが、ウクライナ語によるさまざまな情報が、来日前の、ウクライナや近辺に避難した人たちに届くよう、アウトリーチを工夫するとさらによいと思う。日本に避難したウクライナの方々によれば、来日前に日本の情報にアクセスすることが大変難しかったということだ。この点を改善するアウトリーチ施策があれば、ぜひ工夫してほしい。

○　自身が在留外国人である国際放送局のリポーターが、自らの視点でリポートした番組や、外国人コミュニティーと対話を試みる「やさしい日本語」を学ぶ人たちへのガイダンス動画などを見た。多様な切り口で在留外国人へのサービスに取り組んでいる

点や一方的な発信に留まらない取り組みを目指している点がＮＨＫらしくてよいと感じた。今後は、留学生たちに、ＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮでは、英語だけでなく、多言語で発信していることが届くよう周知を工夫してもらいたい。新型コロナウイルスの感染拡大により留学生が来日できない時期があったことで、日本にいる先輩の留学生たちから話を聞くことが難しくなっている。留学生たちが日本のことを知る入り口として、ＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮを活用してもらえたらよいと思う。

○　国内に在住する外国人といっても非常に多様で、観光客のほか、ビジネス人材、技能実習生、研修生や留学生など、滞在目的、バックグラウンドや職業などが異なる。関心に合わせて、ある程度絞り込み、目的を明確にした番組コンテンツを作ることを検討してもよいのではないか。災害情報へのアクセスのほか、在留資格の問題、医療、住宅、子どもの保育園・学校などの手続きなど切実な問題が多々ある。国際放送の番組を元にしたガイドブック「Japan Life Guide」が作成されたことはすばらしいが、こうした切実な問題も取り上げてもらえるとよいと思う。また、日本は世界的にも難民認定率が非常に低く、長年難民申請をしながら認定されない人、不法滞在になる人も多く、それらの人々は、日本社会に知られないまま、いわば日の当たらない日々を過ごしている。こうした人たちにも必要な情報を届けることは大切だと思う。多文化共生社会の実現には、日本人側の意識改革も重要ではないか。外国人との共生に成功しているコミュニティーもあると思うので、そうした事例を取り上げてドキュメンタリーなどで紹介することも効果的ではないか。また、日本人がおしなべて英語に習熟せず、積極性も欠ける傾向にあることは、国際化を推進する上で壁となっている。日本人が英語力をつけること、国際化することが、多文化共生社会の実現に欠かせないと思う。国際放送が持つ優れたコンテンツを、高校などと連携して、教育コンテンツとして利用してもらうことも考えてはどうか。

（ＮＨＫ側）　ニーズがある人たちにきちんとサービスを届けられているか、効果的な広報活動ができているかという質問は多くの意見に共通しており、強化すべき点であると受け止めた。在留外国人へのサービスだけでなく、ＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮ全体の大きな課題でもある。国際放送については、国内でのＮＨＫの認知とは異なる実態があるので、広報の努力がより必要だ。しかも、在留外国人には、多様なコミュニティーがあり、全員が組織に属しているというわけでもない。一人一人にリーチしていくのには限界があるが、行政をはじめさまざまな機関との連携、ＳＮＳも含めたインターネット、デジタルの活用、あるいはその二つを組み合わせた取り組みが必要だと考えている。国や自治体などへも連携を働きかけているが、担当省庁も多岐にわたり縦割りになっている点は悩ましいところだ。なるべく有効な、広く届くネットワークを持った組織と連携することが大切だと考えている。

デジタルの活用については、国際放送局独自のサイトや外部プラットフォーム、動画配信サービスなども利用して取り組んでいる。また自治体にも、国際放送局の取り組みに関する情報を提供しており、ＳＮＳなどで市

民の方に紹介いただいているところもある。効果的な方法を探るため、日々研究しながら進めているところだ。

ニーズの把握やアウトリーチ、プロモーションの課題を探るため、調査もさまざまな形で行っている。在留外国人全体のニーズを網羅的に調査することは非常に難しいが、在留外国人をメンバーに持つインターネット調査会社と連携した調査も最近始めている。この調査会社に登録していないグループにもアプローチするため、さまざまなサンプル調査やグループインタビューも試みており、「Chatroom Japan」のような新たな取り組みも始めたところだ。

これから来日する外国人が増えてくると思うが、大規模災害が起きた場合、地震などの災害に慣れていない国の人などは、事態を把握できず情報が得られないことも心配だ。そういう人たちには、ＮＨＫワールドＪＡＰＡＮのアプリを事前にダウンロードしてほしい。いざという時に、アプリから情報が得られ安心材料になる。空港で、観光客の皆さんにNHKワールド ＪＡＰＡＮの無料アプリをダウンロードしてもらうことができれば、最低限の情報インフラになると思うので、現在、実践の効果的な方法などを模索しているところだ。今後もさまざまなアドバイスをいただければ大変ありがたい。この意見交換は、またほかの機会にも継続して行いたい。

２０２２年 7月 国際放送番組審議会

２０２２年7月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第６９３回）は１９日（火）ＮＨＫ放送センター（ウェブ会議）で８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「SHOHEI OHTANI: A Baseball Virtuoso」、「Digital Eye Ukraine: The New Satellite War」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	岡田　亜弥	（名古屋大学大学院国際開発研究科 教授）
副委員長	田中浩一郎	（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授 （一財）日本エネルギー経済研究所 参与）
委　員	阪田　恭代	（神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 教授）
委　員	佐藤たまき	（古生物学者、神奈川大学理学部生物科学科 教授）
委　員	杉山　晋輔	（早稲田大学 特命教授、前駐米大使）
委　員	永井　均	（歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授）
委　員	新浪　剛史	（サントリーホールディングス㈱ 代表取締役社長）
委　員	村上由美子	（ＭＰｏｗｅｒ　Ｐａｒｔｎｅｒｓ ゼネラル・パートナー）

（主な発言）

＜「SHOHEI OHTANI: A Baseball Virtuoso」　（6月１２日（日）9:10 ほか）
「Digital Eye Ukraine: The New Satellite War」　（6月１８日（土）9:10 ほか）
について＞

○　「SHOHEI OHTANI: A Baseball Virtuoso」は、大谷翔平選手が、アメリカ大リーグでの挑戦の日々を、自身のことばで語る番組で、大変よくできていた。アメリカで活躍する日本人プロスポーツ選手たちに共通する問題として、文化やことばの壁、食事の違いがあると思う。大谷選手には、専属の優秀な通訳者が付いているが、やはり、これらの問題は乗り越えなければならない壁ではないかと思う。番組ではそうした点に触れていなかったが、問題のあるなしや、どのように乗り越えたのかについて知りたくなった。

「Digital Eye Ukraine: The New Satellite War」について、衛星情報を使ったインテリジェンスの動きは、安全保障や外交の仕事に関わっていれば、周知の事実だとしても、一般の視聴者に、広く知らせることは意義が大きいと思う。番組では、ロシア側の動きが含まれなかったが、ロシアでの、衛星を利用した情報入手やアクションについて、アメリカなどで伝えられている内容に触れられれば、インテリジェン

スの戦いのリアリティーがさらに伝わったのではないか。

○　「SHOHEI OHTANI: A Baseball Virtuoso」は、大谷翔平選手が、アメリカで躍動し、大きなけがに直面しながらも、成長と活躍を続けることができるのはなぜかという謎の一端を解き明かした優れたヒューマンドキュメントだ。１０時間にも及ぶ大谷選手へのインタビューをもとにしており、ＮＨＫの取材力が存分に発揮された番組だ。大谷選手の人間性と困難への向き合い方が、よく描かれており、日本とアメリカの野球ファンの関心や期待に応える番組だったといえる。大谷選手のことばや行動は、野球に関わらず、人生の困難に直面したときの対処におけるヒントになるとも感じた。一方で気になったのは、野球に関心の薄い、ヨーロッパやアジアの視聴者から、一部、否定的な感想が寄せられたことだ。また、専属通訳者の水原一平氏は、大谷選手のアメリカでの活躍を支える、いわば伴走者で欠かせない存在であり、もう少し詳しく取り上げてもよかった。

「Digital Eye Ukraine: The New Satellite War」は、ロシアのウクライナ侵攻をデジタルテクノロジーの角度から描いた秀逸な番組だ。新しい戦争の相貌を示しており、視聴者にも大きなインパクトを与えたのではないか。これまでインテリジェンスは政府、軍や外交当局の専有物だったように思うが、アメリカの大手宇宙開発企業のマクサー・テクノロジーズ社やＳＡＲ（合成開口レーダー）などによる衛星データが公表され、一般市民にも共有されたことで、いわゆる戦争の見える化が進むきっかけになったことが分かる。また、衛星技術によって戦争犯罪の摘発の可能性を高める一助にもなり得るとも感じた。番組では、ウクライナの情報担当庁やマクサー・テクノロジーズ社の副社長、デジタルネイティブの大学生などへのインタビューにより、衛星技術の活用の実態、効力や影響が具体的に示された点がよかった。インタビューの中身は取材にもとづく、充実したものだった。ただ、番組の終盤で、米ＣＩＡ（中央情報局）で長年活動してきたジャック・オーコナー氏（現ジョンズ・ホプキンス大学 地理空間情報学科 学科長）が語った、デジタルテクノロジーの悪用について、さらに具体例や対抗手段を巡る議論に触れられればよかったと思う。優れた番組であると同時に、具体的な衛星技術を紹介、公表することで生じる悪影響も考えられるので、一種の危うさもはらむ可能性もあると複雑な気持ちを抱いた。

○　「SHOHEI OHTANI: A Baseball Virtuoso」では、大谷選手が、困難を乗り越えて活躍している姿を追っており、現在の、複雑な世界に生きる人々にこうした生き様を紹介することは意義が大きいと思う。日本や日本人への理解を深め、アメリカ市場などでビジネスを展開する際にも力になるストーリーだ。困難を努力で乗り越えて成功するというストーリーは、さまざまな地域でそのアイコンとなるような人物像があるもので、日本では野球アニメの主人公などが思い浮かぶが、世界にはその名は通用しない。しかし、大谷選手のように、実際に活躍している人が、不屈の精神で取り組む姿は、時代にもマッチし、世界に発信するメッセージとしてとても魅力的だ。成功ストーリーだけでなく、その裏にある苦悩や、けがや手術を前向きに乗り越える姿、常に自らを省みる姿勢を貫く姿を具体的に描いているところがすばらしい。打率などのデータを可視化して、ひじの故障で下がった打率をどこで回復していくのか、ポイントが分かるチャートがあればより分かりやすかった。また、大谷選手を支えた

要素として、食、特に日本食が果たした役割があれば、ソフトパワーとして内容を取材できるとおもしろかったのではないか。

「Digital Eye Ukraine: The New Satellite War」については、最新のインテリジェンス戦争の難しさをもう少し深く伝えておいたほうがよいと感じた。ラストの「進化を続ける衛星は、これから世界に何をもたらすのか。その行く末は、技術を手にした私たちに託されている」というコメントは、技術の進化のよい点、危うさを両方含む意味でよいと思うが、この「危うさ」についてもう少し強調してはどうかと感じた。両番組とも、日本人も見るべきコンテンツだ。

○ 「SHOHEI OHTANI: A Baseball Virtuoso」について、大谷選手のストーリーで、努力して苦労を克服しようとする 姿勢など、“The 日本人”の価値観ともいえるものをグロー バルに広めたという意味で国際放送の題材として最適だ。日本の大谷が世界のOHTANIになっていく過程を綿密な取材で明らかにしており、大谷選手の人間としての成長ぶりが伝わった。野球への関心が薄い視聴者からはネガティブな反応もあったということだが、ルーマニアの視聴者からは、大谷選手のメッセージに勇気付けられたなど、彼の人間性に共感したという意見もあり、番組のメッセージが野球ファン以外にも届いている。

「Digital Eye Ukraine: The New Satellite War」について、まず日本語版を見て高品質な番組だと思ったので、ぜひ英語化して、日本の安全保障研究や取材で、世界における存在感を示してほしい。また、ＮＨＫでは、「GLOBAL AGENDA」と「クローズアップ現代」で、ウクライナ侵攻におけるデジタル戦略の番組を放送している。国際放送と国内放送の連携がうまくできた成果なのではないか。現代の戦争は、外交や軍事などの専門家だけでなく、市民も巻き込まれざるをえない。特にこの戦争は、宇宙、衛星 まで含めたオールドメインの戦争であり、ハイブリッド戦争だと言われている。こうした戦争の現実について、市民に知らせることは重要だ。また、日本人専門家を取り上げ、日本にもマクサー・テクノロジーズ社のデータなどを使って分析している安全保障専門家の姿をグローバルなオーディエンスに示せたことにも意義がある。

○ 両番組とも大変質が高い。特に「SHOHEI OHTANI: A Baseball Virtuoso」は、大谷選手が大活躍している絶妙なタイミングでの放送だった。本人が、日本語でインタビューを受け、自身のことばで、華やかな活躍の裏側で起こっている、さまざまな心の葛藤を表現していた。海外のメディアが同じようなインタビューをしたとしても、おそらく伝わりきらない内容で、ＮＨＫだからこその番組ではなかったかと思う。大谷選手は、アメリカでも認知度が高く、今後長く影響を残すことが期待される番組でもある。

「Digital Eye Ukraine: The New Satellite War」は、衛星の力を使ったテクノロジーが戦争のやり方を変えつつあることがテーマだが、欧米メディアが伝えてきた内容に、ＮＨＫならではの付加価値を加え、ほかの報道と差別化される内容であるべきだ。日本のメディアとしては、マクサー・テクノロジーズ社に初めてインタビューしたというナレーションもあったが、欧米のメディアがかなり詳しく既に報道している中で、なぜＮＨＫが取材する必要があり、どのような意義があると考えるか、

制作者の意見もぜひ聞きたい。

○　大谷選手については、野球の季節になるとほぼ毎日ニュースで顔を見る有名選手という認識しかなかったが、「SHOHEI OHTANI: A Baseball Virtuoso」を見て、さまざまな苦労を乗り越えて成長し続けているすばらしい人だと改めて感動した。日本のスポーツ選手については、何かを犠牲にして苦労して頑張るという話が多い印象が強いが、大谷選手は常に笑顔で楽しそうで、何があっても前向きな感じが印象的だ。このようなインタビュー番組では、取材する側とされる側の信頼関係が重要で、長い時間をかけて取材を重ねる努力も必要だと思うので、ぜひこれからも、大谷選手の成長の軌跡を取材して番組化してほしい。

「Digital Eye Ukraine: The New Satellite War」については、ここまで、企業や個人がパソコンで戦争に関する情報を得たり発信したりできるということに大変驚いた。一般の大学生が調査で使い始めた、２０～３０年前のＧＰＳは、軍事用のＧＰＳとは比較にならず、場所の誤差などもかなり大きく性能が悪かったが、今は、番組で示されたとおり、民間のＧＰＳでも精度の高いデータが簡単に手に入る。今回の番組を視聴して、オープンソース・インテリジェンスということばを初めて知ったが、オープンソースの情報が信頼できるという前提でないと、それ以降の解析はできないと思う。情報発信者がどのくらい信用できるかが、重要になってくるのではないか。メディアとして、オープンソースを使って分析をすることに関して、何か特に配慮していることがあれば聞きたい。

○　まず「SHOHEI OHTANI: A Baseball Virtuoso」だが、英語放送として関心を集めそうなコンテンツであることは間違いないと思うので、キラーコンテンツと言えるだろう。一線を離れている選手に密着して、その間の活動やリハビリの様子を追跡していること、幼少期から父親と交換ノートを通して、その日の調子や反省点など、やりとりをしているということを明かしたことも特徴的で、ＮＨＫが取材した意義があると思う。球速を示す際に、英語のナレーションで160kmと表現していたが、メジャーリーグ・ベースボールなのでマイルで表し、100 miles per hour（MPH）とすべきではないか。大谷選手も、球速のことに関しては９０いくつなどマイルの感覚で話しているので、マイルをキロメートルにしたことには違和感があった。

「Digital Eye Ukraine: The New Satellite War」について、一昨年に視聴した番組の中に、「Digital Detectives」という優れた番組があったが、それに続く佳作ではないかと思っている。番組を通じて、ハイブリッド戦争の実相がかなり見えてくること、西側の民間企業が提供する衛星画像の精度の高さに改めて驚かされるとともに、そのデータを用いることでオープンソース・インテリジェンスの世界が別次元に入ったというのが、よく表されていると思う。アメリカ政府は、このようなサテライト・インテリジェンス、ＳＡＴＩＮＴを通じて、侵攻に先立ち、ロシア軍のウクライナ侵攻が準備されていると予見していた。２０年前、このような技術が民間の手にあれば、2003年イラク戦争に際しての、アメリカ政府による情報分析の過ちも、民間でチェックができたのではないかと改めて思う。衛星画像が、もはや軍事専門家や政府に独占されていない状況を示す新たな時代に入ったということを、この番組を通じて改めて理解できた。

○　「SHOHEI OHTANI: A Baseball Virtuoso」は、大谷翔平選手の魅力を存分に引き出した、良質な番組だと思う。ファンが見たら、感激するに違いない、彼のパーソナリティに迫り、普段の生活も垣間見えるような作りになっている点に好感を持った。オールスター戦が始まるタイミングで、大谷選手の去就が注目されている時でもあり、時宜にかなった番組だと思う。副題に「Virtuoso」というイタリアのことばが使われているが、これは、通常、音楽などアートの面での巨匠で、名声が確立した人に使われることばだと理解している。大谷選手は非常に活躍しているが、まだ成長途中で、１８歳からの成長の過程を伝えている番組だということを考えると、巨匠、名匠を表す“Virtuoso”より、例えば“rising star”など、これから上りつつある人というイメージのことばの方がよいのではないかと思った。

「Digital Eye Ukraine: The New Satellite War」は、丹念な取材にもとづき、ウクライナ戦争が、テクノロジーに依存している部分が多いことを伝えたよい番組だ。一方、オープンソース・インテリジェンスについては、少し危うさを感じた。終わった戦争を歴史的に検証する場合とは異なり、現在も進行中の戦争で、両陣営がこの番組を見るかもしれないと考えると、手の内を明かすようなことにならないだろうか。また番組の中で協力者として大学生の個人名も出ていたが、安全面や個人情報保護という面で、公共放送の国際放送で個人名を出してよいのか、という点についても気になった。

（ＮＨＫ側）　「SHOHEI OHTANI: A Baseball Virtuoso」は、４年前に、大リーグで挑戦を始める大谷翔平選手を取材したいという、スポーツ番組の若手スタッフの声を受けて始まった。大リーグや選手サイドと話し合いを重ねた結果、信頼関係ができ、日本のテレビメディアでは、ＮＨＫのみ取材をさせる、という許可を得た。年２回のインタビューをベースにしており、当初インタビューのみの許諾だったが、途中で密着が許される場面があり、多少オフの部分も撮影できるようになった。大谷選手にも、ことばや文化、食事の壁は当然あったと思う。時間的、条件的制約で、もう一歩及ばず、そこまで取材できなかった。水原一平さんの存在があったため、大谷選手が壁をあまり感じずにいられたというのも事実だ。野球一筋に生活する大谷選手を、ことばだけでなく、文化、食事面でもサポートしている存在が水原さんなのだと思う。大谷選手には、番組後もインタビューを行っており、今後も取材を続けて番組化を目指したいと思っている。世界に発信できることを目標に頑張っていきたい。打率のデータについては、打率のチャートなどを使い、もう少し丁寧に紹介したほうがよかったのではという反省もある。一方で、今回はインタビューをベースにしたヒューマン・ドキュメンタリーを目指すという考え方から、野球のテクニカルな要素は極力排除して制作したという面もある。球速の表記については、キロメートルでなくマイル表示にすべきだった。今後は、気を付けて表現したい。

（ＮＨＫ側）　海外の視聴者の反響について、世界中の３０人近い視聴者からリポート

をいただいているが、もともと野球に興味がないという意見が２割ほどあった。アメリカ、台湾やメキシコなど中南米では大谷選手の名前をよく聞くということだが、それ以外の国々では、あまり野球を知らず、大谷選手も知らないという状況で、「そもそも関心がないので、自分が報告する必要がなければおそらく見なかっただろう」というような意見があった。一方で、「野球に興味はなかったが、この番組は非常におもしろかった」とのコメントもあった。「野球というスポーツそのものに関心がわいた」「これはスポーツ番組ではなく、ヒューマン・ドキュメンタリーだ」というコメントもあり、制作者としてうれしい反応だった。委員から「まさしく“The 日本人”を描いたドキュメンタリーである」との意見があったが、一人の若き日本人を通じて日本を知ってもらいたいと制作した、その思いが伝わった部分もあると考えている。今後のプロモーションや展開については、野球に関心のある北米や台湾に向けた展開をより意識して、ふさわしい戦略を立てていきたい。副題のVirtuosoということばについて、日本では大谷選手を「二刀流」と呼ぶことがあるが、世界向けには、大谷選手にふさわしい別のことばを探したいと思った。Virtuosoは、現地のスポーツ記者が使っている表現で、投打のどちらも優れている特別な能力を持つ、という評価が現れているものだと思う。確かにまだ若いが、あえて野球の名手ということで、この副題を付けた。

（ＮＨＫ側）　２年前に制作した「Digital Detectives」という番組の反響の大きさと制作の手応えから、デジタル技術を駆使した真実究明の取り組み、調査報道の一つの手法として、今年度からスタートさせたのが「Digital Eye」だ。今回のウクライナ編が実質的な１本目になる。中身の正確さや与える影響は相当吟味しながら制作しているが、全体にはまだ開発途上にあるシリーズで、手探りで制作している。今後、検討を加えながら、さらに精査していきたいと思う。ＮＨＫならではの強み、切り口を生かし、欧米メディアとは内容を差別化するべきだという点について指摘のとおりだ。アジア、日本の放送局であるＮＨＫならではの工夫は、今後さらに大切にしていきたい。また、「メディアとしてオープンソース使用で配慮している点」については、一にも二にも情報の信ぴょう性の検証だ。今回も数多くの専門家に協力いただいて、情報を分析しており、この点は最重要と考えて取り組んでいる。

（ＮＨＫ側）　「Digital Eye」の開発過程で、国内、海外の衛星情報会社と協力関係を築きつつある中、ウクライナ侵攻が起こった。マクサー・テクノロジーズ社が積極的に自社の画像を公開したり、スターリンクがウクライナのフェドロフ副首相とのＳＮＳでのやりとりだけで機材を提供したりと、衛星が戦争に深く関わり、戦争の見える化が進むような事象が進行した。衛星が戦争の形態を変えていることを実感し、この番組を企画した。インテリジェンスに関わる情報は取材が難しく、ＳＮＳなどで語られている事象を、どれだけ裏付けを持って伝えられるか、ウクライナ政府の情報当局やウク

ライナ政府と取引のある商業衛星などに取材を重ねて精査した。戦況に影響を与えるなどのリスクのない範囲の情報公開にすべきだという点についても、リスクを検証し、取材相手の回答を尊重しつつ複数の専門家に相談しながら決めていった。ロシアの行動については、どこまでを事実として扱えるか、難しい部分もあり今後の課題だ。「GLOBAL AGENDA」と「Digital Eye」のスタッフが、相互に情報交換し、連携して番組を制作できたことで、両方の番組にとってよい効果が出たと考えている。大学生の名前を実名で伝えることについては、本人のＳＮＳのアカウントが実名になっており、既に各種メディアに実名で出ていること、ご本人の承諾もあり、実名で出すという判断をした。

２０２２年 ６月 国際放送番組審議会

２０２２年６月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第６９２回）は２１日（火）ＮＨＫ放送センター（ウェブ会議）で８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「Fukushima Monologue Ⅱ」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	岡田　亜弥	（名古屋大学大学院国際開発研究科 教授）
副委員長	田中浩一郎	（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授 （一財）日本エネルギー経済研究所 参与）
委　　員	阪田　恭代	（神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 教授）
委　　員	佐藤たまき	（古生物学者、神奈川大学理学部生物科学科 教授）
委　　員	杉山　晋輔	（早稲田大学 特命教授、前駐米大使）
委　　員	永井　　均	（歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授）
委　　員	仲本　千津	（社会起業家、㈱ＲＩＣＣＩ ＥＶＥＲＹＤＡＹ 代表取締役ＣＯＯ）
委　　員	村上由美子	（ＭＰｏｗｅｒ　Ｐａｒｔｎｅｒｓ ゼネラル・パートナー）

（主な発言）

＜最近の国際放送の動きについて＞

○　大学と多言語メディア部が、会場とオンラインでのハイブリッドのイベントを共催し、200 名ほどの学生、教職員と多言語メディアについて意見交換を実施した報告があった。学生や教職員たちが、ＮＨＫワールド ＪＡＰＡＮの存在を知り、身近に感じる機会となり、また、番組の制作現場の話が、学生たちの、多言語を生かす仕事のイメージを広げるなど、双方にとって有意義なイベントだったのではないかと思う。

○　大学との共催でイベントを実施したことは、大変すばらしい。ぜひ、今後、ほかの大学でも同じような試みを実施してもらえたらと期待している。

＜「Fukushima Monologue Ⅱ」　（3月１２日（土）１０：１０ほか）について＞

○　東京電力福島第一原子力発電所の事故の後、避難指示が出た後も許可を受けて一人残り動物たちの世話を続けた、福島県富岡町の松村直登さんの日常を軸に、東日本大震災の傷跡の深さや福島の復興の内実を問う、大変重いテーマの番組だった。復興は

道半ばという現実を突き付け、震災後の課題の一端を浮き彫りにした点でも意味のある番組だ。番組では、被災後、荒れたままだった田んぼで米作りをする松村さんの挑戦が描かれたが、除染のために持ち込まれた土や石で覆われた田んぼの様子に衝撃を受けた。復興のために行われた作業が、逆に、人々の生活再建を阻害する現実でもあり、復興の内実を象徴する場面となっていた。また、事故後、飼っていた牛を松村さんに預けて世話してもらった半谷信一さんが、震災で動物たちが死んでいった光景を振り返り「地獄だ」ということばを漏らす場面があったが、これは原発事故で町を後にした人々の心の傷を映し出していたと思う。震災と原発事故の悲劇が忘れられ、風化していく状況に警鐘を鳴らす場面となっていた。また、荒廃した土地を耕し、化学肥料を使わずに米を育てる松村さんの姿勢と思いに感動した。収穫した米を食品検査所に持っていき、放射性セシウムが確認されなかった場面ではほっとしたが、福島の現地では、震災から１０年以上たっても不安と隣り合わせの生活を強いられていることを、改めて目の当たりにした。こうした現実を視聴者に伝えた点も意義深い。去年放送された、前作の「Fukushima Monologue」と同様に、松村さんの人間的魅力に加え、映像と音が美しく仕上がっていた。また、ピーター・ヴァン・ガームさんのナレーションも落ち着きがあってよかった。国内で放送した完全版では、田植えの準備の中で、水路を覆うかん木や土砂を除去する様子や、トラクターが壊れてしまう場面も描かれていたが、英語版では割愛されていた。こういった場面は、生活再建の困難さを示すエピソードとして取り入れてもよかったのではないか。ナレーションで松村さんの気持ちを語る部分について、松村さんの確認を経てオンエアされているという理解でよいか。

○　番組は、去年３月に放送され、４月の審議会で意見交換した「Fukushima Monologue」の続編だが、継続して取材し、現実が風化しないよう伝え続けることは、大変大事だと思う。「Fukushima Monologue Ⅱ」では、松村さんが、セシウムの摂取を減らすために化学肥料の使用を勧める自治体との葛藤を乗り越えて、有機肥料での米作りを決意したり、ほかの住民と連携を深めたりするなど、前作から進展があり、生活にも少し希望が見えてきた。重いテーマだが、安全な米を収穫することにより、希望が見えたことも伝わった。ただ、「Fukushima Monologue Ⅱ」から初めて見る視聴者や、福島について十分理解していない海外視聴者向けには、番組の前提となる情報や誰の視点から語るストーリーなのかについて、再度説明をした方がよかったのではないか。

○　松村さんの人並外れた努力に胸を打たれ、美しい映像や音楽により感動が深まった。同時に、ウクライナへの軍事侵攻なども一因となり、日本でも電力危機が叫ばれ、輸入物資の供給が滞る事態も経験し、また戦争となれば、原発への攻撃が現実としてあり得ることを突きつけられる今、原発事故の捉え方は変容してきていると感じた。重い課題を提示する一方で、田んぼで動き回るアイガモのひなど、動物の姿に気持ちが救われる場面もあり、また、最後に安全でよい米を収穫できたことにもほっとした。重いテーマと希望の提示がうまく組み合わされ、よい番組になっていた。

○　映像美や動物とのふれあいを通して、福島の状況の奥深さを表現し、大変引き込ま

れる内容だった。福島に関しては、原発事故に起因する農産物への風評被害が、国内外でいまだに続いている印象を持っているが、番組では、きちんと事実を示し、収穫された米からセシウムが検出されないことを見せていた。農産物や米に関しては問題ないことを、映像の中できちんと示せたのは、今後の風評被害を防ぐ意味で非常に大事なポイントだったのではないか。

○　去年の「Fukushima Monologue」に続き、松村さんのキャラクターを上手に生かした、この番組の制作チームの力を感じた。ＮＨＫならではの制作の取り組みだと思うが、長時間、相当の労力をかけて作られた番組だと思う。松村さんと、カメラマン、プロデューサーの間に、大変深い信頼関係があったからこそ完成した番組だと感じた。視聴者の目には触れないにも関わらず、番組から感じることができるほどの信頼関係があったことが、番組のクオリティーを高めたのだと思う。また、「Fukushima Monologue Ⅱ」は、「Fukushima Monologue」より、さらにストーリーの展開が面白くなった。「Fukushima Monologue」では、残された家畜を見捨てることができないという思いから富岡町に残った松村さんの、子ども時代の話や家族関係を織り交ぜ、事故後に残された家畜の面倒を見る姿を紹介していたが、「Fukushima Monologue Ⅱ」では、恐らく松村さんの中で、被災地に残る意味が少し深まり、ワンステップ新しい展開となったのではないか。養蜂や米作りなど、人間の営みが自然と比べていかに小さいものか、自然の中で営みを可能にするには、人間が自然への畏敬の念を忘れてはいけないということを、松村さんの活動を通して感じたが、これが番組の大きなメッセージではないか。強いメッセージ性があり、記憶に残る内容ですばらしい番組だ。

○　「Fukushima Monologue」と同様、「Fukushima Monologue Ⅱ」も映像が美しく、細部にわたる描写が印象的だったが、「Fukushima Monologue Ⅱ」の前半は前作との重複が多いのではと感じた。また、松村さんの活動は、稲作、養蜂など、放射性物質の残留濃度が高い作物、製品への取り組みで、積極的にチャレンジしていることは分かるが、海外の視聴者にどう受け止められるのかが気になった。「It may take a hundred years or a thousand years. But life will find a way. Life always finds a way. 100年も越え、1000年も越え、命は絶えることなくつながり続けるだろう。命は常に前に進んでいくものだ。」というエンディングのナレーションが極めて感慨深く、考えさせる内容になっていた。松村さんの、物事をポジティブに捉えて、なるべく事故前の平時に戻して前に進もうという生き方は理解できるが、一方で事故の被害の甚大さを軽く捉えられることがないよう、番組としてはバランスに気を配るべきだとも思った。

○　「Fukushima Monologue Ⅱ」は、「Fukushima Monologue」に新たな展開や説明が加わり、背景もより分かりやすく、見ごたえのある番組になっている。原発事故が生態系全体を破壊した現実を厳然と突き付けると同時に、生き残った動物や再生された水田や畑の美しさが印象深く描かれていた。事故以降、１１年間、動物を生かす努力を続けてきた松村さんの強じんな精神力に敬服し、頭が下がる思いだ。昔の写真も効果的に使われ、現況との対比から、農業に携わってきた人たちのこれまでの苦

労を思い起こし、同時に原発事故で営みや歴史が失われたことへの無念さも改めて感じた。今回は再生がテーマと理解したが、動物を飼育し、その後、養蜂も始め生命の神秘に魅せられたことが描かれていて、前回よりも希望を与えるエンディングになっていた。また、同じ地域の、ほかのコミュニティーの人たちが、松村さんの努力をどのように見ているのか、松村さんの努力がコミュニティー全体の再生につながるのかという点にも興味が湧いた。災害や紛争で苦しむ世界中の人々に、ぜひこの番組を見てほしいと思った。

○　原発事故の被害や、復興の問題については、網羅的にすべてを描くことは不可能で、切り口を絞って描かなければならないが、この番組の切り口は大変新鮮に感じた。主人公の松村さんが、生き残った動物の世話をし、荒れ果てた田から根気よく石を取り除いて田を再生させる姿はとても印象的だ。松村さんの地域の状況が原発事故の被害のすべてではなく、松村さんの地道な取り組みが復興のすべてではないことは分かったうえで、よい切り口で、伝える意味があったと思う。ナレーションも落ち着いたトーンでよかった。自治体との間に肥料の問題で葛藤が生まれた場面も、リアリティーがあり、松村さんの活動が東日本大震災のすべてを語れるわけではないにしても、一つの現実として、強いメッセージ性を持つ番組だと思う。英語のナレーションも上手く、世界中の人々に向けて放送する番組として、極めて質の高い、よい番組だと感じた。日本国内でも放送してほしい。

（ＮＨＫ側）　「Fukushima Monologue」は、去年、「福島モノローグ」としてＥテレで放送し、大きな反響を呼んだ。また、新たに取材した内容と合わせ、今年３月、「福島モノローグ　完全版」としてＢＳ１でも放送している。

（ＮＨＫ側）　去年と今年の番組で「重複が少し多かった」という意見について、去年の番組とどのようにつなげて、初見の視聴者に必要な情報を入れるかということは、編集上悩んだ点だ。振り返るシーンを入れた結果、国内版で入れた水路の工事や山を切り開く場面、田んぼでトラクターが壊れる部分は、カットせざるをえなくなり、バランスの取り方が難しかった。また、稲作や養蜂など、新たな農作物へのチャレンジについては、松村さんが、自分の故郷が再生していることを示すために、積極的に挑戦した面もあると思う。町に生業ができれば戻って来る人が増えるかもしれないと考え、もともとあった稲作と養蜂を選んだということもある。「Fukushima Monologue」では、松村さんが震災で失ったもの、コミュニティーや壊れた町、そして復興の途上で残ったものも壊されていく現実を多く描く結果になった。二重の喪失状況の中、「こんな町で生きていくのは嫌だ」と話していたが、恐らくその中で、「自分に残ったものは何か」と考えた結果、最後に残された宝である、田んぼや農地の再生に心が向かっていったのだと思う。前回の撮影の最後に、畑で「みんなが戻ってきたら、野菜を分ける」という話が出たが、実はその後に、「ちょっと水路が問題だが、田んぼはあるの

だから、米もやりたい」とも語っており、挑戦するならば継続して撮影したいと思ったことが、続編につながるきっかけだった。2015 年産米以降、福島県産米から基準値を超える線量は検出されていないが、松村さんの場合、震災後初めての米作りということもあり、事前に自治体の営農再開担当者などとも相談し、土壌の検査結果なども確認しながら、慎重を期しつつ撮影を進めていった。番組では松村さんと自治体の担当者たちが田んぼで議論になり、松村さんも、ジレンマから怒りの感情が表に出ていたが、実際には担当者も、１つ１つの農地に足を運んで、生産者と意思疎通を図りながら、安全な米作りや農地の再生に尽力しており、松村さんも担当者に指摘されたリスクをコントロールしながら作業をしたと聞いている。結果的には、セシウムは出ず、そのことも情報として、ストーリーの中で自然に伝えられるよう工夫した。去年の審議会で、こうした情報は、情報番組でなくても重要だという指摘を受けたので、助言を念頭にシーンを入れた。地域のほかのコミュニティーの反応について、事故前は 16,000 人いた町で、取材が終わった時点では 1,800 人ぐらいの住民がいた。以前の住民が戻った実数は未発表だが、ごく少ない割合だと思う。コミュニティーとしてのまとまりはまだできていない印象だ。田んぼの再生に取り組んでいる人は富岡町ではまだ震災前には遠く及ばない。松村さんと交流のある帰還住民は、今は半谷さんぐらいしかいない状況だ。ただ、番組を見て、町のスーパーマーケットなどで松村さんに声をかけて「おまえ、田んぼ、よく頑張ったな！」と喜びのことばを伝えてくる高齢の帰還住民たちもいると聞いている。

（ＮＨＫ側）　独白的なナレーションについて、内容は松村さんの許可を得ているものかとの質問に関して、内容は松村さんのインタビューに即しており、ことばをモノローグ形式にして伝えた。海外では、福島の状況を知らない人がいるのでストーリーの前提をあえてことばにしたほうがよいのではという点については、今回のように、続編のある長い番組の場合には、どの程度前提を紹介するか、意見を参考に検討していきたいと思う。ウクライナ侵攻や原発への攻撃、日本における電力危機などの新たな事態を経験し、戦争が日常を一気に変えてしまうという状況の中で、原発事故から１１年目を迎えたことで、たしかに去年とはまた違う受け止め、メッセージが加わったと思う。１１年目の撮影が終わった段階で、１０年目の意味がより深く分かったところもある。引き続き機会を見て、スタッフたちが築いてきた深い人間関係を基に、継続取材の強みを生かした番組を作っていけるように努力したい。

２０２２年 5月 国際放送番組審議会

２０２２年５月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第６９１回）は１７日（火）ＮＨＫ放送センター（ウェブ会議）で７人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。ひき続き、「Dear Mr. Collins － 80 Years Since the Japanese－American Internment －」「Where We Call Home: Far from Their Homeland, But Not in Heart」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	岡田　亜弥	（名古屋大学大学院国際開発研究科 教授）
副委員長	田中浩一郎	（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授 （一財）日本エネルギー経済研究所 参与）
委　　員	阪田　恭代	（神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 教授）
委　　員	佐藤たまき	（古生物学者、神奈川大学理学部生物科学科 教授）
委　　員	杉山　晋輔	（早稲田大学 特命教授、前駐米大使）
委　　員	永井　　均	（歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授）
委　　員	仲本　千津	（社会起業家、㈱ＲＩＣＣＩ ＥＶＥＲＹＤＡＹ 代表取締役ＣＯＯ）

（主な発言）

＜「Dear Mr. Collins － 80 Years Since the Japanese－American Internment －」（４月９日（土）13:10 ほか）
「Where We Call Home: Far from Their Homeland, But Not in Heart」（４月２５日（月）9:30 ほか）
について＞

○ 「Dear Mr. Collins － 80 Years Since the Japanese－American Internment －」について、日系アメリカ人の戦後の市民権回復運動を詳しく知ることができ、勉強になった。戦争や紛争下における、排外的な行動や集団の不寛容、という普遍的なテーマの番組で、今年が日系人の強制収容の開始から８０年の節目というだけでなく、ロシアによるウクライナ侵攻が続く今だからこそ、時宜にかなった内容といえる。戦後、日本に戻った後、市民権の回復を求めてアメリカ人弁護士に手紙を書いた、川手正夫さんを軸に、同じ日系人でアメリカに留まったイワオ・シミズさん、手紙の相手で、市民権回復訴訟を支援したウェイン・コリンズ弁護士の視点を交差させることで、川手さんの行動の歴史的な意味が浮き彫りになった。他にも、442部隊に象徴される、アメリカ軍兵士として、危険な戦地で命をかけて戦うことでアメ

リカ市民としての忠誠心を示した日系二世の志願兵についてや、戦時中の訴訟で、強制収容の正当性、アメリカに忠実な市民の収容の是非を争ったものについても、触れられればさらによかった。強制収容所や隔離センターの場所を示す地図の表示があれば、視聴者の理解がより深まったと思う。今後も、こうした良質な歴史教養番組の放送を希望する。

「Where We Call Home: Far from Their Homeland, But Not in Heart」は、ロシアによるウクライナ侵攻下における、日本在住のウクライナ人コミュニティを描く、貴重なドキュメントで、ウクライナの人々の思いが伝わるよい番組だ。ウクライナ正教会のポール・コロルーク司祭の家族の歴史を振り返ることで、ウクライナ人の苦難の歴史をかいま見ることができる工夫もあった。コロルーク司祭が池の前で歌を歌い、その後、涙を流す場面や、“必要がない戦争”という司祭のことばに胸が詰まった。長年日本で暮らすオクサーナ・ピスクノーワさんの、ウクライナのことばと文化を次世代につなげようとする姿勢と努力にも感動した。後半、日本在住のオランダ人の和紙職人を紹介したパートは、外国人の目を通して日本を再発見する内容でとてもよかった。

○　ウクライナ関連の「Where We Call Home: Far from Their Homeland, But Not in Heart」は、全体としてよくできていたと思う。

「Dear Mr. Collins － 80 Years Since the Japanese－American Internment －」は、日系アメリカ人が経験した苦難に焦点を当てたよい番組で、国内で放送したことにも、意味があると思う。しかし、この番組では、市民権の回復に主眼をおき、収容所の中でもツーリレイク強制収容所に焦点を当てたことにより、重要な、いわゆる補償や賠償をめぐる問題が正確に伝わりにくくなっていると感じた。番組では、レーガン元大統領の 1988 年８月の演説を紹介し、強制収容が“mistake”だったと発言しているところを紹介していた。だが、“mistake”ということばの紹介だけでは歴史的な経緯や背景が正しく伝わらない恐れがある。今年５月３日に亡くなった、アメリカ合衆国元運輸長官のノーマン・ミネタ氏、2012 年に亡くなった元上院議員のダニエル・イノウエ氏とその妻たちの努力で、1988 年に当時のレーガン大統領が署名して成立した“Civil Liberties Act of 1988”（市民の自由法）では、“（米国民であった日系アメリカ人を強制収容したことは）fundamental injustice（根本的な不正義であったこと）をacknowledgeする（認める）ので、関連した資金をrestitution（返却）する”ということばが出てくる。日本語では「見舞金を返却する」という程度の意味で、法的な責任を伴う補償・賠償とは言えない。法的な責任を意味することばを避け、restitution（返却）やredress（不正矯正金の返却）ということばを使ったところが興味深く、歴史的にも非常に大事な点だ。その点を省き、“mistake”と言ったことのみを伝えると、アメリカ側の姿勢やニュアンスが正しく伝わらず、誤った評価につながるのではないか。故アイリーン・ヒラノ氏が中心になってつくった、ロサンゼルスの全米日系人博物館に、レーガン元大統領が署名した、日系人への２万ドルの支払いを約束した文書がある。その文書にも確かに“mistake”ということばは使われているのだが、「市民の自由法」には、より強い表現、“grave injustice（ゆゆしき不正義）について心からapologize（謝罪）する”と書いてあり、レーガン元大統領の発言の中にもこのことばがある。この番組は国際法や法律を専門としている人に

対して作っている番組ではないが、この点は大事だと思うので、もう少し踏み込んで調べて、きちんと反映した上で、市民権の回復や主人公に焦点を当てる番組として完成した方がよかったと思う。日系人などで、ミネタ氏の活動に思いを寄せている人たちは、上記の点に違和感を持ったのではないかと感じた。

○　「Dear Mr. Collins － 80 Years Since the Japanese－American Internment －」における、“Civil Liberties Act of 1988”の扱い方については、さらに検討の余地があると思うが、他方、日系人強制収容のアナザーストリー、いわゆる日系人部隊、兵隊のみならず、兵隊にならなかった人たちのストーリーが描かれ、よく知られているマンザナー収容所以外の収容所のストーリーに光を当てたということは意義があり、歴史への理解が深まったと思う。また、歴史を、川手さんとコリンズ弁護士の息子さんの個人の物語として伝えることで、日本とアメリカそれぞれの父と子、日本人とアメリカ人の関係など、さまざまな絆や物語が浮かび上がった。日米関係に関わることなので、歴史や日系人の問題の扱い方について、より細かく史実を検証して伝えることは大事だ。

「Where We Call Home: Far from Their Homeland, But Not in Heart」は、今、伝えるべきテーマの番組だ。来日したウクライナの避難民の情報を知りたい、というニーズにこたえるため、ウクライナ人向け、日本人向け、その両方など、情報ごとに工夫しながら伝えてほしい。字幕も英語字幕がよい場合と、ウクライナ語字幕を付けるべきものなど場合によって工夫が必要だと思う。

○　「Dear Mr. Collins － 80 Years Since the Japanese－American Internment －」について、強制収容があったことは知っていても、実際に収容された個人のプロフィールに触れることはまれなので、番組の意義は大きい。時間をかけて個人の歴史を追うことにより、アメリカで育ち、アメリカの正義に憧れて強い信念を持つ２世の人たちが、日系人であるという理由で収容されたときのつらい気持ち、また、戦後、日本で生活することを決めた後も市民権を取り戻したいと強く思った気持ちを、じっくり考えながら見る機会になり勉強になった。参考番組として見た日本語版には、英語版に含まれていた、コリンズ弁護士の息子が父親の考え方の背景にあった信条について語るシーンがなかった。英語版と日本語版の違いについて、制作者として留意している点があれば、知りたい。

「Where We Call Home: Far from Their Homeland, But Not in Heart」は、心打たれる番組だった。ウクライナとロシアの、宗教や言語の違い、歴史的な背景や文化の違いなど、理解が足りない部分を補う番組が求められていると思う。番組後半で紹介された、高知県で和紙をすくオランダ人のストーリーでは、日本の誇る伝統文化が、外国から来た人に支えられていることに改めて気づかされた。

○　「Dear Mr. Collins － 80 Years Since the Japanese－American Internment －」は、落ち着いた雰囲気で、見やすかった。番組の中で、メリーランド大学の追跡プロジェクトが紹介されているが、詳しい説明がなかった理由を知りたい。アメリカでは、米国籍を持っていても異国人扱いする人間を処遇するときに、よくプロジェクトということばを当てるが、日本人強制収容にもプロジェクトという

ことばが使われていた。かつて、プエルトリコからの移民がニューヨークに多く入ってきた時代に、彼らに対してもプロジェクトということばが使われていた記憶があり、収容ではなかったが、類似していると感じた。

「Where We Call Home」は、日本に長く滞在している外国人の生業や日常を通して日本社会を考えるきっかけになる。在日ウクライナ人コミュニティの活動を紹介する前半部分は、時宜に適した内容で、人々に寄り添ううちにウクライナ民族主義と言われるものの目覚めを感じさせるドキュメントだった。日本の中には“ウクライナは降伏すべきだ”という意見もあるが、“民族主義とは何であるか”をこの番組をきっかけに考えることができると思う。

○ 「Dear Mr. Collins － 80 Years Since the Japanese－American Internment －」を見て、米国内で強制収容所に入れられ、人権を侵害された人たちの存在を改めて知る貴重な機会になった。最近、戦争に関する研究が変化してきているように感じている。これまでは、例えば、戦争がなぜ起こったのか、天皇の存在とは、ナチスドイツでどのようなことが行われていたのかなど、第二次世界大戦を中心に大きな視点で語られることが多かったが、最近は戦争中の女性たちの役割など、メインの歴史ではないが、戦争の中で生きた人々の生活などが、研究により詳細に分かってきているという印象だ。この番組も、そうした研究の進展に寄与するものではないかと思う。今、動画配信サービスで、日本が朝鮮を併合した 1910 年代の韓国やその後の日本を舞台に韓国人家族の物語を扱ったドラマが配信されており、特にアメリカで話題になっている。在日韓国人の立場や考え方、日本での境遇が、描かれているのだが、ドラマの描き方がそのまま受け止められれば、日本を見る視点にもたらす影響も大きいのではないかと思う。ドラマの影響力は大きいので、今回のテーマも、例えば、裁判の具体的な部分をドラマ化するなどして、より多くの人たちに歴史を伝えていくということも、手法としてあるのではないか。

「Where We Call Home: Far from Their Homeland, But Not in Heart」について、ロシアの攻撃を受ける祖国から離れ、遠い日本で暮らすウクライナの人たちが、自分たちの言語や信仰を守ろうとしている姿に胸を打たれた。信仰は生きるよりどころだと思うので、教会の存在を知らせることは励みになるだろうと感じた。後半の、オランダ人の和紙職人、ロギール・アウテンボーガルトさんの紹介について、日本に興味を持ったきっかけや、来日以来、今日にいたる足跡など、時間的制約があるとは思うが、もう少し詳しく知りたかった。

○ 2019 年２月の国際放送番組審議会の視聴番組「MANZANAR REVEALED」では、マンザナーの日系人強制収容所に焦点を当て、自らの体験をもとにミュージカル「Allegiance」を制作・主演した日系人俳優のジョージ・タケイ氏を通して、人種間の分断や、自由・平等と国益の間で揺れ動いてきたアメリカを見た。今回は、異なるアングルから強制収容の問題を捉えており、日本に帰国した元日系アメリカ人の息子が、父の過ごした収容所を訪ね、現地に残った日系アメリカ人や彼らの市民権の回復を支援したアメリカ人弁護士の息子などと出会う旅に同行するという興味深いストーリーだった。映像やナレーションは抑制が利き効果的だった。息子たちの出会いを通し、戦争によって翻弄された親たちの歴史をたどることで、８０年前の戦争がいまだ

過去のことになっていないことを改めて思い知らされた。また、現在のウクライナにおける戦争でも、強制収容が起こっていることを聞くにつけ、人間の愚かさが変わらないことを思い知らされる。折しも沖縄返還５０周年のタイミングでもあり、戦争が人々に残した傷が、５０年たっても８０年たっても残り、家族はその足跡をたどっていくものだと改めて感じた。アイデンティティーとは何か、国とは何なのかなど、深く考えるきっかけとなった。戦後アメリカにとどまったイワオ・シミズさんの息子のヒロシ・シミズさんが、父親が、日本語を話し、日本的な生活を求めていたと語り、一方、日本に帰国した川手さんは、アメリカ人としてのアイデンティティーを持ち、アメリカ的な生活様式を好んでいたことは大変興味深い。今日アメリカで、アジア人に対するヘイトクライムが頻発している状況の中、こうした番組を放送することは重要だと思う。

「Where We Call Home: Far from Their Homeland, But Not in Heart」は、日本に在留するウクライナ人の心の叫びを聞くという意味で大変よい番組だ。東京での抗議活動の場面では、場所を画面上で表示した方が理解しやすいのではないか。

（ＮＨＫ側）　日系人の強制収容に関するＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮの番組は、「MANZANAR REVEALED」のほか、強制収容を経験したカリフォルニア大学教授だった日系人を扱った「I too was a Child of Camp」など継続的に取り上げている。今回の番組も、日本とアメリカの人たちの戦後も続くつながりに焦点を当てた番組として制作した。強制収容を語る際のことばの使い方は大事なポイントで、ことばの重みを考えるべきだと思う。日系人の中には、internmentと言わずにincarcerationというより強い表現を選んで使い、relocationという言い方を好まないなど、日系人自身のことばの選択にも様々な考え方が反映している。今日の指摘も踏まえ、今後の番組制作に生かしたい。

（NHK側）　ディレクターは、これまでアメリカの日系人強制収容をテーマに、数本の番組を制作してきた。今回は強制収容を過去の歴史として描くのではなく、自由と民主主義を掲げる現在のアメリカにおけるマイノリティーの在り方、分断やヘイトなどトランプ政権後のアメリカに通じる問題として捉えたいという問題意識で制作した。企画が生まれたきっかけは、アメリカの日系人団体から、この番組の主人公、川手晴雄さんが強制収容所を経験した父の足跡をたどるために渡米するという情報を聞いたことだ。晴雄さんは、父親の正夫さんが帰国し日本人として生きることを選んだ後、市民権の回復を求めていたことをこれまで知らなかった。なぜ市民権の回復を求めたのかという疑問から、息子が父の心の内をたどる番組にすることで、これまでの強制収容の歴史を構造的に捉える番組とは切り口の違う、ヒューマンなストーリーにしたいという意図があった。市民権回復の裁判で争点になった点にもっと時間を割いてもよかったのではないかという意見と、1988 年のレーガン元大統領の謝罪の意味について、きちんと精査し

て伝えないとミスリードになるのではないかという意見については、４９分という時間の中で何が正解だったか、迷うところだ。過去の番組との差別化のために、晴雄さんが父の心の内をたどっていく、よりヒューマンなストーリーにすることで、少しその他の点が弱くなってしまったかもしれない。国際放送版とＢＳ１で放送した国内放送版の違いについては、テーマが強制収容で、日本とアメリカの見方が違うテーマでもあるので、素材を吟味して編集を変えようと考えた。その中で、「『ソクラテスの弁明』を読め」とコリンズ・ジュニアさんが父のコリンズ弁護士から生前に言われたことについて、国内版で使うか否か迷ったが、時間の問題もあり、日本の視聴者向けには、晴雄さんの目線にしぼって作ることにした。国際放送版は、アメリカの視聴者も意識して、日本人の息子が父親の足跡をたどる姿と、アメリカで今も人権弁護士として活躍する息子が、なかなか勝ち目のない裁判に、父がたった１人で向き合った真意は何だったのかと探る姿もあわせ、２人の息子がそれぞれ父の足跡をたどるストーリーを目指し、コリンズ親子の部分を国内版よりも多くして編集し直した。メリーランド大学の資料が１か所しか出てこなかったのはなぜかという質問について、メリーランド大学のプロジェクトチームの調査により、強制収容所で正夫さんが逮捕され２５日間拘束されたという事実が明らかになり、その結果、コリンズ弁護士の息子さんに加え、メリーランド大学のプロジェクトチームも訪問先に加わったという事情がある。詳しく見ていけば、プロジェクトのデータから分かることも多いかもしれないが、見ている人が分かりにくくならないよう、正夫さんに関する情報にとどめた。

（ＮＨＫ側）　「Where We Call Home: Far from Their Homeland, But Not in Heart」について、ウクライナ語字幕を表示すべき箇所もあったかと思うので、今後の検討に生かしたい。指摘のあった民族意識の目覚めや、ウクライナとロシアとの違いについては、時間が許せば、もう少し深められればよかったと思う。以前は日本にウクライナ正教会はなく、ロシア正教会の教会のみ存在していた。2004 年のオレンジ革命を１つのきっかけとして、コロルーク司祭がウクライナ正教会を立ち上げた経緯がある。オクサーナさんのように、クリミア併合とウクライナ東部紛争をきっかけにして、話すことばをロシア語からウクライナ語に変えた人もいる。今回の侵攻を受け、ウクライナ人コミュニティの中で、より民族意識が高まってきている印象がある。委員の意見を参考に、今後につなげていきたい。

（ＮＨＫ側）　「Where We Call Home」は、２年前に在留外国人との多文化共生を一つのテーマに放送を始め、国内版も限定的に、制作してきた。2022 年度から、ＢＳ１の定時枠として毎週火曜日の午後２時から放送している。国内放送との連携は、さらに進めていきたいと思う。

（ＮＨＫ側）　番組後半の「Workpedia」について、オランダ人の和紙職人の背景を詳しく知りたいという意見があったが、７分のミニコーナーとして制作して

いるため、その中で簡潔に語れることを伝えている。魅力的な人物も多いので、さらに詳しく伝えるべきストーリーについては、別途、２０分尺のドキュメントで取り上げていくことも検討していきたい。日本に避難しているウクライナ人については、取材を進めているので、今後の放送も検討し、日本での暮らしぶり、地元の人との関わりについても伝えていきたいと考えている。

○　ウクライナ避難民について、地方も受け入れに積極的なので、東京だけではなく、地方の取り組みについても取り上げてほしい。

（NHK側）　ウクライナ避難民の受け入れについては、各自治体も大きな役割を担っている。また、各地の大学で受け入れるなど、さまざまな動きがあると認識している。「Where We Call Home」をはじめ、そのほかにも、ウクライナ情勢に関連する番組を数多く放送している。国内放送と国際放送の連携で制作された番組を、国際放送から国内放送へ、また国内放送から国際放送に迅速に展開しており本数も増えている。この連携は、今後も続けるとともに、地域でウクライナを支援する動きについても取り上げるべく、取材や制作を進めたい。

２０２２年 ４月 国際放送番組審議会

２０２２年４月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第６９０回）は１９日（火）ＮＨＫ放送センター（ウェブ会議）で９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「国際放送の役割」について意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	岡田　亜弥	（名古屋大学大学院国際開発研究科 教授）
副委員長	田中浩一郎	（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授 （一財）日本エネルギー経済研究所 参与）
委　　員	阪田　恭代	（神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 教授）
委　　員	佐藤たまき	（古生物学者、神奈川大学理学部生物科学科 教授）
委　　員	杉山　晋輔	（早稲田大学 特命教授、前駐米大使）
委　　員	永井　　均	（歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授）
委　　員	中曽　　宏	（㈱大和総研 理事長）
委　　員	仲本　千津	（社会起業家、㈱ＲＩＣＣＩ ＥＶＥＲＹＤＡＹ 代表取締役ＣＯＯ）
委　　員	村上由美子	（ＭＰｏｗｅｒ　Ｐａｒｔｎｅｒｓ ゼネラル・パートナー）

（主な発言）

＜「国際放送の役割」について＞

○　ＮＨＫの国際放送は、正確で迅速、公平な情報を視聴者に提供し、信頼できる放送を目指してきたと理解している。テレビ、ラジオ、インターネットやＳＮＳなどの媒体を含め、ＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮが国際的な認知を得つつある今、危機の時代だからこそ、上記の基本に立ち返るべきだと考える。在外邦人、日本在留の外国人やアメリカをはじめとする海外の人々、それぞれのニーズを把握し、信頼できる情報を提供することが重要で、“誰に、何を、どのようにして伝えるのか”という点が問われている。“どのようにして”に関しては、ライブストリーミングやオンデマンドサービス、ＡＩ多言語字幕の拡充などの努力を、今後も続けてほしい。“何を”、つまり、伝える情報の内容も極めて重要だ。喫緊のテーマは、ウクライナや東アジアの情勢、新型コロナウイルス感染防止の問題などだが、情報のアップデートをすることはもとより、多角的な視点、多様な切り口での解説番組を定期的に、引き続き放送してほしい。参考番組として視聴した、「GLOBAL　AGENDA」は、ロシアによるウクライナ侵攻について、中国の対応や戦争終結の可能性を含めて議論が展開し、大変参考になった。最近では、ロシア側の残虐行為について、国際刑事裁判所（ＩＣＣ）が戦争犯罪の捜査に動きつつあるが、戦争犯罪や、いわゆる人道に対する犯罪、侵略犯罪な

ど、国際法の問題に焦点を当てた解説番組も制作されるとよいと思う。“誰に”という点で重要なのは、在外邦人、日本在留の外国人の人々だ。ウクライナからの避難民に必要な生活情報やワクチン接種の情報など、引き続き関心が高いトピックについて発信してほしい。そうした発信が、ＮＨＫだけではなく、日本への信頼感を高める一助になる。海外の視聴者については、重要地域のアメリカ以外で、視聴者から何が期待されているか、情報があれば教えてほしい。

○　ＮＨＫの国際放送は、以前に比べると、各段にサービスが充実してきていると理解したが、特に、国際放送を届ける対象として、重要地域にアメリカが挙げられている点に興味を持った。現在のアメリカにおける日本への関心は、国内で考えられているよりも高く、期待も高いと思う。期待が高いということは、責任も伴うので、気を引き締めて向き合う努力も必要だ。また、ロサンゼルスなどに限らず、広い地域で、強い関心を持たれていることも理解するべきだ。日本に留学経験がある人や、ビジネスでつながる人はもちろん、各地の出身議員や知事、ワシントンＤＣで外交に関係する立場の人々の間でも関心が高いが、日本の情報は十分ではないと感じる。国際放送を届ける対象として、いわゆる知日派に絞るのではなく、各地域を含め、アメリカの社会の中心にいる人々に届く内容にしていくことも必要なのではないか。ウクライナ情勢に関連して、最近話題になっている、国際法やＩＣＣについては、日本国内にも、英語で発言できる専門家がいるので、国際放送で発信すべきテーマだと思う。

○　ここ数年、ＮＨＫの国際放送は変貌しており、その成果を届ける対象別に状況を聞けたことは参考になった。アメリカに深く浸透しつつあること、国内の在留外国人のコミュニティに寄り添う努力が進んでいることはよいことだ。その他の地域について、特に東および東南アジアにどのように届けていくのか、考えを聞きたい。韓国については、新政権が誕生して、政治・外交が変わる可能性もあり、英語放送を見ている韓国人は多いので、この機会をうまくとらえることも必要だと思う。ウクライナの戦争については、メディアもひとつの戦場となる、ハイブリッド戦だといえる。マスメディアのみならずソーシャルメディアが戦いの場となる中、どのように、何を、発信していくのか、さらに考察し、信頼されるメディア、アジアならではの国際放送を目指す姿勢が重要だ。また、ウクライナからの避難民について、従来の在留外国人コミュニティへの支援とは違った観点から、日本社会としてどのような支援がありうるのか、さまざまに材料を提供してほしい。たとえば、通訳ボランティアもその一つだと思うが、大学生の間でも関心が高く、支援の手がかりになるような情 報を発信してほしい。

○　ＮＨＫの国際放送の特性は、日本的な座標軸で欧米のメディアとは少し違う視点を提供することにあるのではないか。届ける相手としては、有識者で、時事問題に関心がある層を意識しているということなので、日本ならではの“DEEPER LOOK”、より掘り下げた視点、を提供してほしい。目下、重要な時事問題はウクライナ情勢だ。日本社会に根を下ろした沖縄在住のウクライナ人女性、本間カタリンさんを紹介した番組「Where We Call Home」を通じて、沖縄の人々の、ウクライナ支援の姿勢を世界に発信したことは、開かれた日本の新しい姿を国際社会にアピールする効果が大きかった。ニュースで伝えられる、ロシアの攻撃の不当性や、ウクライナの人々の苦

難については、よく理解できるものの、今は、その先にある、より本質的な、新たな疑問が膨らむ時期に来ていると思う。国際社会や当事国が外交努力を通じて侵攻を回避する余地は本当になかったのか、なぜロシアがここまで追い詰められたのか、ＮＡＴＯの拡大政策やミンスク合意との関連、ウクライナのＮＡＴＯへの非加盟の方針が示された時期と戦争の関係、この戦争が民主国家と専制国家の対立という単純な構造で語られることの是非など、考察を深めるために提供してほしい視点が増えている。また、ロシアに対する経済制裁が、世界と日本のビジネス界にとって、どのような意味合いを持つかも知りたい。長期的にみて、ロシアと中国の経済が、ともに世界経済から排除される方向に動く場合、中国経済に深く関与している日本や世界の企業にとっても大きなビジネスリスクが生じる。さらに、戦争犯罪を裁くことが可能なのかについて、ＩＣＣが管轄権を行使できるのか定かではなく、問題は複雑であることが繰り返し報道されているが、さらに理解を深める解説が求められている。ポーランドの避難民受け入れに関する絶賛と、これまでの移民政策への批判の矛盾、また国際社会がミャンマーや香港の市民をどのように受け入れていくのかという問題、エネルギー価格の高騰の行く末やＥＵが主導してきた脱炭素化の動きへの影響など、疑問は派生的に増えつつある。ぜひ、客観的な立場で疑問点の整理を行い、より掘り下げた視点や解説を提供してほしい。

○　国際放送を届ける対象として、アメリカに暮らしている人々を中心とする海外、また日本国内に暮らす外国人が考えられるが、それぞれが求めるテーマが何か、さらによく考える必要がある。海外向けには、日本の伝統、自然災害への対応やＳＤＧｓの観点が大きなテーマになってきたし、日本国内に暮らす外国人向けのコンテンツも、言語が多様化し内容も充実してきた。ただし、他にも、日本から発信すべき価値やテーマがないのか、さらに考えを深める時期だと感じている。日本が、西側諸国の一員であり、アジアの一員でもあるという立ち位置から考察を深めてみてはどうか。ウクライナの問題に関しても、日本ならではの視点から、さまざまな角度で問題を掘り下げられる可能性がある。その意味で、「GLOBAL　AGENDA」は、中国の政府アドバイザーがスピーカーの一人であり、専門家と議論を展開していた点が興味深かった。西側だけでなく、中国、インドや南アフリカの有識者や、ロシア派と言われている人たちを巻き込み、意見を引き出す場を持てるのは、日本だからこそではないか。こうした独自性をよりいっそう発揮してほしい。

○　今は、若者がテレビをあまり見ないこともあり、ネットオンリーの社会に向かっているという感覚を持っていたが、ロシアの地方の年配の人たちは、ロシアの国営放送しか見ないという状況が紹介されているのを見て、やはりメディアは一つのものに特化してはいけないと感じた。軍事侵攻からの２か月、さまざまに見てきて、ＳＮＳなど新しい通信手段が主流になっているのは間違いないが、まだテレビが大きな力を持っているとも感じた。年代の違いや、国の違いもあるが、やはり、複数のメディアを持つ重要性を実感した。また、最近、報道における情報が類型化されてきていると感じている。侵攻が始まった頃は、ロシア国内の知識層のさまざまな声、侵攻に反対する声なども報道されていたが、今はほとんど伝わってこなくなってきた印象だ。また、ウクライナやロシアの国内事情に関して、類型化された情報しか出てこない。これは、

ウクライナが国として、同じような情報しか出していない、あるいは個人から発信される情報も多様性がないということか。参考番組として視聴した「DEEPER LOOK from New York」の前編（Part1）の中で、アメリカの政治学者イアン・ブレマー氏が、ヨーロッパがウクライナに非常に同情的であるということに対し、「みんな白人なので」という発言をしていた。ウクライナの人たちはほとんど白人だと思うが、マイノリティーからの情報が出ていないことに気が付いた。移民が多くないということが理由かとも思ったが、発信される情報が単純化されているのか、どこかでフィルターが掛かってしまっているのか疑問を持った。さらに気になるのは、ロシアに対する排斥の動きだ。侵攻が始まったばかりの頃、スポーツ界で、「ロシアの人は参加させない」という動きが多くあったように思う。無意味な差別に走らないよう、抑制する対策や、個々のロシア人と、差別なくつきあっていく方法などをどのように伝えていくか、考えを聞きたい。

○　ウクライナ、ロシアに関する番組を視聴して考えたのは、日本の国際放送が、多言語サービスを活用しながら伝えるべきことは何かということだ。日本国内では日本語で、国際社会では英語で、多くの情報が流布している中で、世界中の、英語以外の言語を話す人々、日本に住む日本語や英語を理解しない人たちに届ける使命について、ＮＨＫにしかできないことがあるのではないか。また、日本語や英語で伝える際にも、今起こっていることだけでなく、日本とウクライナとの歴史的なつながりを理解し、今後の影響も見通す内容を伝えることが重要ではないか。「DEEPER LOOK from New York」の中で、ブレマー氏が、これらの点について短くコメントしていたが、こうした内容こそ、他のメディアで報道されていない独自の情報であり、ＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮならではの付加価値だと言えるのではないか。「Where We Call Home」の中で、沖縄在住のウクライナ人をクローズアップしたことは、日本とウクライナという視点を感じ、興味深かったが、もう少し踏み込んで、歴史的、経済的、社会的に今後、起こり得る影響についても深く掘り下げるとよいのではないかと思った。

○　危機に際しては、報道に対する姿勢が改めて問われる。ＮＨＫ、そしてＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮの真価を問われる局面であり、実力を発揮する時でもある。また、国内放送番組との間で素材を共有したり、国内版を放送したりすることは、単に海外に日本の情勢を知らせるというだけでなく、海外に向けた発信について国内でも知ってもらうよい機会だと思う。「GLOBAL AGENDA」も、国内で放送されることがあるが、やはり国外の人が同じ問題についてどのように考えているのかを知る、また、ＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮの発信について知る、よい機会になっていると思う。ＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮは、さまざまな出来事に対しての対応が早くなってきており、多言語化が進んでいる点も評価できる。ただ、「GLOBAL AGENDA」の放送日は、ウクライナ危機が起きてから約２か月後だった。もう少し早いタイミングで、例えば３月に放送していたら、より多くのインパクトを与えたのではないか。「DEEPER LOOK from New York」は、ブレマー氏が、鋭い視点で語る興味深い番組だった。ニューヨークスタジオで収録、発信した番組だったが、アメリカ国内の視聴者に対し、ニューヨークからの発信、というブランディングは意味があったのか少々気になった。アメリカでは、地域により、視聴者の関心や考え方の違いが大き

いが、いわゆるディープサウスや中西部では、ニューヨーク発、とうたわれると、逆に関心が減り、反発を覚える視聴者もいるのではないか。内容はすばらしいが、ＮＨＫワールド ＪＡＰＡＮのブランディングとして、アメリカでの「DEEPER LOOK from New York」の意味づけはもう少し考えた方がよいのではないか、と思った。

○　ニューヨークのスタジオを活用した番組はこれまでも多く視聴していて、いずれもすばらしいと思っているが、今回、参考番組として視聴した「DEEPER LOOK from New York」は、やや物足りない印象を持った。アメリカのアジア系アメリカ人のMCがアメリカの政治学者にインタビューをするという構図で、アメリカのメディアとの差別化やＮＨＫの独自性を感じることはできなかった。一方、「GLOBAL AGENDA」は、中国やヨーロッパの人に加え、日本人の研究者も２人出演し、日本のメディアならではのキャスティングで好感を持った。ニューヨークスタジオを活用したモデルとしては、以前、エンターテインメントに関するテーマで宮本亜門さんが出演した「GLOBAL AGENDA」がモデルになるのではないかと思うが、アメリカ人の論客だけではなく、アジアの視点も議論の中に含めることができると、多様で複眼的な視点を提供できるのではないかと感じる。アメリカのメディアでは編成されないような内容や、取り上げられないような視点を、ＮＨＫワールド ＪＡＰＡＮの強みと考えて番組を検討するとよいのではないか。今、どのメディアもウクライナの報道に集中している。緊急性と重大性を考えると、もっともではあるが、同じように紛争が起きている地域、例えば、内戦状態にあると言われるミャンマーのほか、アフリカの紛争地帯にも目を向けるべきだ。特にアジアについては、より多く取り上げるべきで、昨年以降、非常に深刻な状況にあるアフガニスタンは歴史的にソ連に翻弄されてきたという意味では、今回のウクライナと共通する面も持っている。両国を対比するような番組や、取り上げられることの少ない中央アジア、東ヨーロッパの旧ソ連圏と言われる地域の動向など、欧米のメディアでは捉えきれていない内容についても目配りをして報じると、より全体を包括的に理解することができるのではないか。また、日本国内の在留外国人向けのコンテンツ、特に災害関係の情報が充実し、多言語サービスも拡充していることは、ありがたく朗報だと思う。多くの在留外国人に届けるためには、日本にいる日本人がＮＨＫワールド ＪＡＰＡＮの活動を知ることも重要だと思うので、国内放送を通じ、今後、広報の一層の充実に努めてほしい。

（ＮＨＫ側）　アメリカや東南アジアは、ＮＨＫワールド ＪＡＰＡＮが広く届いている地域だと言える。特にインドネシア、タイ、ベトナムの３地域については、多くの視聴者がおり、中国も含めて、新型コロナウイルス感染拡大前は、いわゆるインバウンドといわれる、旅行者増加の波があった。来日した旅行者が、ＮＨＫワールド ＪＡＰＡＮと親しみ、国に帰り、広めてもらうという考え方で対応していた。アメリカについては、年に１、２回、アメリカ公共放送のＰＢＳ各局の幹部、社長などと話す機会がある。これらの幹部は、経験豊かな人が多く、ＮＨＫワールド ＪＡＰＡＮへの関心や理解もあり、自局での２４時間配信に意欲を示すところも多い。「アメリカ

のメインチャンネルにはない、Different Perspective（異なる視点）とAlternative（代替的な観点）を出してくれる点がよい」という評価を得ている。ニュースが中心の他のグローバルチャンネルに比べ、多様な番組が編成されている点も独自性として評価されている。ＰＢＳ局は全米に350局ほどあるが、２４時間放送の他にも、６つの番組をブロック配信する方法や、１本ごとに特別配信する方法も加えると、全米の広い地域、ほぼ８割に届いている。ブロック配信の中に入れている、「NHK NEWSLINE」「Journeys in Japan」「CYCLE AROUND JAPAN」「Dining with the Chef」や「Asia Insight」など。公共ラジオ局である、ＮＰＲ（National Public Radio）の一部地域でも、「Asian View」というラジオ番組を放送している。２年前から始めて現在３０ほどの地域に増えた。日本と接点が少ない地域でも、日本理解を広めるため、こうした方法で発信を拡大したいと考えている。ＰＢＳは、三大ネットワークに比べて規模は小さく、予算は必ずしも潤沢な局ばかりではないが、先日、１９年連続“アメリカの中で最も信頼されるメディア”として受け止められているという世論調査が発表されていた。こうした観点からも、ＰＢＳを通じた連携はぜひ進めていきたいと思っている。ウクライナについての施策は、どのような分野で何をするのか、ウクライナ語のホームページを立ち上げる前にも、検討を重ねた。ＮＨＫの国際放送局にはウクライナ語を話す職員が２人いるがどのようにその利点を生かせるか。日本国内でウクライナの人たちに対する支援の動きが起きているが、どのように世界に発信するのか。グローバルチャンネルとしては、後発の、ＮＨＫワールドＪＡＰＡＮのウクライナ語サービスとして、何ができるのかを日々考えながら取り組んできた。「GLOBAL AGENDA」は、本日、さまざまに意見をいただいたので、ぜひＩＣＣや国際法の問題も含めて、検討していきたい。また、より立ち上がりを早くして、放送できるように努めたいと思う。ロシア人に対する無意味な差別を抑制すべきだ、という意見について、このことは社会全体がどう受け止めるかの問題だと考える。これまでも、太平洋戦争中の日系人の強制収容、差別についても取材、放送を続けてきているので、ロシア人への排斥につながるような単純な見方はすべきではないとも考える。また、2019 年の統計で、約 140 万人の在外邦人に向けて、今年４月から、ホームページ上で見られる日本語のニュースや番組をさらに増やした。また、ラジオに加えて、テレビもオンデマンドあるいはライブで見ることができるようにした。今まではサービスの中心がニュースだったが、４月からは「さわやか自然百景」「小さな旅」など番組も提供している。日本国内からは視聴できず、海外の日本人、あるいは日本語がわかる人が見られるサービスとなっている。

（ＮＨＫ側）　視聴者から何を期待されているのかについては、アメリカおよびその他の地域でアンケート調査などを行っている。どの地域でも、日本のニュースがこの４、５年、トップにあがっている。加えて、日本以外のアジアのニュース、旅行、食べ物、テクノロジーが求められているという調査結果

だ。私たちが編成を考える際、これらを参考にして、番組のバランスを考えて放送している。

（ＮＨＫ側）　ウクライナの侵攻を受けて、フェイクニュースが飛び交う、情報戦が展開されている中、ファクトを追求し、解説委員や専門家による事実の深掘りを、あらゆる伝送路を通して伝えていく、というのがＮＨＫの報道姿勢だ。また、安全管理を最優先にして、現地の取材も展開している。今、ウクライナの西部、リビウを拠点に１か月以上、職員・スタッフが現地に留まり、一昨日まではキーウで１週間以上、取材を続けている。「ロシアのニュースが単純化している」との指摘について、やはり今、ロシアの取材環境が少々厳しいことも影響して、そのように受け取られているのかと思う。また、委員から提示された “なぜロシアがここまで追い詰められたのか”、“ロシアに対する経済制裁が世界あるいは日本のビジネス界にとってどういう意味合いがあるのか”そして“ロシアないしプーチン大統領の戦争犯罪を、ＩＣＣは本当に裁くことができるのか”といった指摘は、現場に共有して対応したいと思っている。１点、ＮＨＫにしかできない報道ということで言うと、ＮＨＫは 2017 年から５年間にわたって、ウクライナの公共放送の支局展開など、災害報道も含めて、さまざまな支援をＪＩＣＡの事業として取り組んできた。現在、ウクライナの公共放送は、キーウから西部に拠点を移し、シェルターにスタジオを作って２４時間放送を続けているが、ウクライナ公共放送から、ＮＨＫが特別な許可を得て、臨時放送拠点の中で取材を続けている。先日この内容は、「クローズアップ現代」で放送したが、これからも取材を続けて、戦時下の公共放送のあり方を考える番組の制作も検討していきたい。これはＮＨＫにしかできないことではないかと思っている。また、ウクライナからの避難民への支援も、視聴者から「自分たちに何ができるか」という問い合わせが数多く寄せられているので、これらの点についても目配りしつつ、放送していきたいと考えている。